

平成24年度  
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会



## はじめに

### —マイクロ・レベル FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。FD を三層に分けて考察することの意義とその具体的な内容については、これまでも FD 研修会等で折にふれてお伝えしてきましたが、2009 年に学士教育課程と大学院教育課程における FD が義務化され、今年で 5 年目を迎えることから、改めて FD 三層論について確認し、今後の FD 活動の発展につなげたいと思います。※

マイクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、2007 年以降、本学では、複数の学部で、また学士課程教育センターが中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。その具体的な試みがピアレビューであり、センター主催の授業方法改善のためのワークショップの実施です。

今後は、マイクロ・レベルの FD を、教員のキャリアパスの問題と連動させ、助教、准教授、教授のそれぞれの職位に応じた FD のフェーズ（わかる→実践できる→開発できる→教えられる）を設定することで、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を用意していきたいと考えています。

※ 2007 年に大学院設置基準が見直され、また、2008 年に大学設置基準が見直されたことにより、2009 年度から学士教育課程と大学院教育課程において FD の実施が義務化されました。

大学 FD 委員会委員長

教学部長 菊池重雄

# 目 次

## I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的 .....	1
(2) 委員構成 .....	1
(3) 今年度の活動計画および課題 .....	1
(4) 活動状況 .....	2
(5) 活動の成果 .....	4
(6) 今後に向けて .....	4
2. 学部の活動.....	5
3. 教師教育リサーチセンターの活動.....	44

## II 教員研修

### 新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容 .....	47
(2) 配付資料・参考資料 .....	48
(3) 実施の成果 .....	50

## III コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要 .....	53
2. 集計結果及び公表 .....	53

### 参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容 .....	76
2. 「授業評価アンケート」用紙.....	78
3. 玉川大学 FD 委員会規程.....	80

### ※本文中の記載内容について

- ・本文中の文字表記については、原文のままとした。
- ・役職名称は、平成 24 年度当時の記載とした。

# I 大学 FD 活動状況と今後の計画

## 1. 大学 FD 委員会

### (1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

### (2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	菊池重雄
副委員長	学士課程教育センター長	大藤正
委員	文学部	奥山望
委員	農学部	谷本亮
委員	工学部	小倉研治
委員	経営学部	伊藤良二
委員	教育学部	宮崎豊
委員	芸術学部	辻裕久
委員	リベラルアーツ学部	小山雄一郎
委員	通信教育部	山口意友
事務担当	学士課程教育センター	山崎千鶴
事務担当	教師教育リサーチセンター	平山守
事務担当	教学部 教務課	高橋正彦
事務担当	教育企画部 教育企画課	大野太郎
事務担当	人事部 研修センター	柳原達宏

### (3) 今年度の活動計画および課題

昨年度に引き続き、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2012 に沿って取り組んだ。すなわち、

1. 各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始
  - 1) 学内 FD 研修会の開催
  - 2) 大学コンソーシアム京都主催「FD フォーラム」を始め、関連研究会等参加

- 3) 学内授業参観の改善および実施
2. 双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
  - 1) 学内 FD 研修会の開催
  - 2) 学内授業参観の改善および実施
  - 3) 他大学の取組事例の調査
3. 全授業科目の成績評価分布を公表する
  - 1) ルーブリックに関する研修会開催
  - 2) 他大学の取り組み事例の研究
  - 3) 学内 FD 研修会（ワークショップ）開催
4. FDer の養成プログラムの作成と実施
  - 1) 「FD フォーラム」、「大学教育研究フォーラム」等、関連研究会等参加
  - 2) FD、SD、ED、PD、それぞれの活動対象および内容についての確認
  - 3) FDer 候補者の選定およびプログラム検討
5. 玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
  - 1) Credo に関する他大学の取組事例の継続調査

#### (4) 活動状況

<平成 24 年度>

4月24日	第1回大学FD委員会 開催
4月25日	東京大学国際シンポジウム「日英高等教育改革の動向」職員派遣
5月26日・27日	大学教育学会年次大会（北海道 北海道大学）教職員派遣
5月31日	第2回大学FD委員会 開催
6月2日・3日	日本高等教育学会年次大会（東京 東京大学）職員派遣
7月14日	日本学術会議シンポジウム「学士課程教育における言語・文学分野の参照基準」職員派遣
7月16日～19日	25th International Conference on The First-Year Experience 教員派遣
7月22日	文部科学省主催「大学教育改革地域フォーラム2012 in 同志社大学」職員派遣
9月5日・6日	初年次教育学会年次大会（東京 文京学院大学）教職員派遣
9月8日～16日	海外認証評価機関への訪問および大学運営の視察のため、アメリカ合衆国に職員派遣
9月14日	第3回大学FD委員会 開催
9月21日・22日	大学情報・機関調査研究集会 Meeting on Japanese Institutional Research (MJIR)2012（福岡 九州大学）職員派遣
10月6日	法政大学教育開発支援機構FD推進センター「第10回FDシンポジウム ピア・サポートによる授業改善」教職員派遣
11月20日	第4回大学FD委員会 開催
11月23日・24日	大学教育学会課題研究集会（島根 島根大学）職員派遣
11月30日	科目担当者研修会「学生の学修時間を確保するための授業計画-

	方法と課題」開催 新潟大学主催大学教育改革フォーラム「学士課程教育教育における学習成果の質保証」職員派遣
12月7日	大学コンソーシアム京都「高大連携教育フォーラム」職員派遣
12月11日	科目担当者研修会「情報社会への対応を目的とした情報デザインリテラシーの導入」開催
12月12日	北里大学主催「第9回北里大学高等教育開発センター講演会」職員派遣
12月14日	Future Skills Project 研究会主催「産学協同就業力育成シンポジウム2012」職員派遣
1月18日	日本学生支援機構主催「平成24年度障害学生修学支援ブロック別地域連携シンポジウム」【関東地区】(茨城 筑波大学) 職員派遣
2月21日	科目担当者研修会「学生の主体的学びへの転換のために」開催
2月23日・24日	玉川大学「大学FD・SD」開催
2月28日	大学コンソーシアム京都「第18回FDフォーラム」教職員派遣
・3月1日	大学FD委員会主催「平成25年度新任教員研修会」開催
3月14日・15日	京都大学高等教育研究開発推進センター「第19回大学教育研究フォーラム」教職員派遣
3月22日	第5回大学FD委員会 開催
3月25日	ELFプログラム担当者オリエンテーションミーティング 開催
3月26日	「一年次セミナー」新規担当者研修会 開催

上記のほか、8月21日に開催された「玉川学園将来計画委員会」において、金沢工業大学の藤本元啓先生（教授、修学基礎教育課程主任・ライティングセンター長・入試部長を兼任）をお招きし、「単位の実質化に伴う学修時間の確保と教職員の役割」と題した講演をしていただいた。これは、次年度より16単位履修上限の導入（平成25年度入学生より適応）することに向けたもので、大学設置基準に沿った時間の学修を学生に促すための取組について、先行して実施されている金沢工業大学の事例を伺った。

また、今年度より新たに実施されることとなった「大学FD・SD」（2月21日開催）においては、立命館大学の沖 裕貴先生（教授、教育開発支援センター長）より「中教審が求める大学の質保証に向けて～ルーブリック評価の考え方～」としてご講演をいただいた。これは、次年度科目におけるシラバスの充実に向け、ルーブリック評価についてご示唆をいただくことを目的とした。

また、秋学期においては大学授業の授業参観を実施し、大学教員のほか、広く学園教職員が参加した。提供科目については全ての学部から教職員全体へ科目提供がなされた。

なお、「授業評価アンケート」は春学期・秋学期ともに実施した。ただし、コア科目については春学期に言語表現科目群および社会科学科目群、また秋学期には自然科学科目群および総合科目群の開講科目を対象に実施した。さらに、今年度より開設されたユニバーシティ・スタンダード（US）科目については、一部を除き、実施した。なお、実験

実習実技科目は除くことは例年のとおりである。

#### (5) 活動の成果

今年度の活動計画に基づき、活発な取組をすることができた。とくに、他機関が開催する関連研修会等には教員のみならず職員も多く参加し、教職協働を実現すると同時に、教員と職員が同じスタンスに立って FD 活動を推進することができた。

また、前項のとおり、学内においても各種研修会等を開催した。今年度は次年度から始まる大きな教学システムの改革に向けた整備、土壌づくりを目的とするところが大きかったが、一定の理解は得られたものと考えている。

ただし、授業参観については、広い範囲への公開が定着してきているものの、一方で、参観者がいない科目もあった。また、通常の授業時間内で行なっているため、大学教員が参観しにくい状況があることもわかった。

#### (6) 今後に向けて

次年度においても、他機関主催の関連研究会等には積極的に参加し、関係教職員への情報提供を行いたい。また、学内で開催する研修会等についても多様な内容のものを開催していきたい。とくに、次年度においては授業方法・技法の研修会やワークショップを開催する予定である。アクティブ・ラーニングに関する研修会等はもとより、PBL (Program Based Learning) やルーブリックについての研修会等を実施したい。

また、FDer の養成については、候補者を選定し、次年度よりお迎えする FDer 認定教員のご協力をいただき、養成プログラムの作成に着手することとする。

詳細については、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2013 に沿って進めていく。

## 2. 学部の活動

平成 24 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文学部	7 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後*1	全員	学内外 (Web)*2	学内外実施
農学部	7 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工学部	5 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*3	学内実施
経営学部	7 名	5 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学内実施
教育学部 (通信教育 部含)	9 名	4 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学内実施
芸術学部	6 名	12 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内	学内実施
リハビリアーツ 学部	6 名	2 回	秋セメ終了後	全員	—	学外実施

\*1: 対象全科目を春セメスター (春セメ)、秋セメスター (秋セメ) いずれかで 1 回実施 (重複実施はせず)。

\*2: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は、比較文化学科のみ実施している。

\*3: 学外には総括した内容、学内には全てを詳細に、報告書冊子と Web で公表している。

※コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

## § 文学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

基本的な理念はこれまでと変わらない。

社会の大学に対する期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実を受け、大学教育はそれに対応すべく、役割意識と方法論の変革を余儀なくされている。また不況下での就職難に対応するため、学生の意識付けと就職指導も、大学にとって重要性を増している。かかる現状認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が文学部の理念や教育目標の実現に向けて意識を高め、職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現できるような体制を構築することを目標にしている。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、人間学科主任、比較文化学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と人間・比較文化両学科の FD 担当（比較文化学科は FD 委員が兼務）で、文学部 FD 委員会を組織している。

この FD 委員会は、年に 2 回の FD 委員会を招集する他、各学科の学科会あるいは運営委員会等においても定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項の審議を行っている。

### 3 平成 24 年度の活動内容

#### (1) 授業設計・成績評価ミーティング（人間学科）

##### ①概要

複数教員が授業担当をする諸科目について、とりまとめ役を座長として授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的としたミーティングを行なう。

##### ②到達目標

各科目の授業担当者間において科目の教育目標達成のための合意形成を得ること。

##### ③活動内容

授業経験の報告と意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性、教員による授業評価

##### ・「人間学総合セミナー」

平成 24 年度の「人間学総合セミナー」は、キャリア形成のあり方をテーマに、町田市および三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社（以下、三菱 UFJ R&C）と連携して準備を進め、PBL（Project Based Learning）を実施した。

キャリア形成のための社会人基礎力がどのくらいついたかに関し、授業アンケートを実施した結果、受講生は 3 つの指標すべてにおいて「力がついた」と

の自己評価であった。また PBL の成果物に対する評価との関係から、PBL 型の授業において課題解決のために社会人基礎力のどの分野を育成すればいいかという認識が得られた。(詳細は後注参照)

・「人間学演習」

各演習において設定したテーマや、担当教員の専門分野に応じて、それぞれの内容、方法により授業を進めた。また、演習の一環として、ゼミ研修旅行や3年生対象のキャリアセミナーなども実施した。授業の進め方や行事の実施方法、あるいは成績評価のあり方などに関する授業担当者による意見交換は、必要に応じて学科会で実施した。これらのことにより、受講生は人間学的研究を深めるとともに、生涯学習やキャリア計画にとって基盤となる機会をもつことができたと考えられる。

・「人間学基礎ゼミ」および「人間学基礎演習」

5名の担当者により、授業の計画、評価について話し合いを行なった。授業終了後、授業評価を行った。

・「名著講読」

5名の担当者により、授業の計画、評価について話し合いを行なった。授業終了後、授業評価を行った。またコスモス祭を利用して科目紹介展示を計画し実施した。

④評価

上記授業において、授業展開のための合意形成と、今後に向けての指針、さらに学生による授業評価の点において、掲げた目標は100%達成できた。

なお、授業設計に関わる調査・研究の一環として、「人間学特殊研究」の授業成果を第19回大学教育研究フォーラム(京都大学高等教育研究推進センター主催：3月14日～15日)において発表した。

※茅島路子・宇井美代子・小田部進一・林大悟・宮崎真由・平嶋宗, 「KitBuild Map System による主体的な学習時間の確保」(『第19回大学教育研究フォーラム論文集』2013. に採録)

(2) 授業評価アンケート(比較文化学科)

①概要

比較文化学科専門科目群全科目について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

②到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間にどのような差があるかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③活動内容

実施時期：今年度は春秋両 Semester に開講している科目は春 Semester 末に、秋のみの科目は秋 Semester 末に実施した。

対象科目：比較文化学科の全科目(ゼミと教職関連を除く)

集 計：対象となる全87科目中82科目を回収、有効回答数は2,984であった。  
集計はクラス別、科目グループ別、科目群別、全体の4レベルで行った。

フィードバック：

結果は大学ホームページ上で公開すると共に、各教員には、授業改善に資するため、授業ごとの集計結果を返却する。

#### ④評価

予定通り実施した。ホームページへの掲載は4月以降になる。

### (3) 学外セミナー等への教員派遣

#### ①概要

他大学でのFD活動の取り組み方法やその成果についての情報を収集し、文学部のFD活動活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

#### ②到達目標

文学部専任教員の20%を何らかの学外FD研修会に派遣する。

#### ③活動内容

##### 1. 大学コンソーシアム京都主催 第18回FDフォーラム

開催日：2月23日～24日

派遣：3名（5名参加予定も、体調不良と公務の都合により2名欠席）

##### 2. 京都大学高等教育研究推進センター主催 第19回大学教育研究フォーラム

開催日：3月14日～15日

派遣：6名（内3名は論文発表）

#### ④評価

参加9名は学部専任教員の26%であり、数値目標は達成した。

### (4) 授業参観

#### ①概要

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施。授業を公開する教員は、参観者からの意見を聞くことによって改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業運営の方法を参考に自分の授業改善に結びつける。

#### ②到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長短所を自覚し、授業力の向上の方法論的手がかりを得る。

#### ③活動内容

実施時期：秋学期

実施内容：人間学科「人間学総合セミナー」

文学部教員1名（複数回参観）、職員1名、学外（三菱UFJ R&C）  
3名（複数回）

人間学科「人間学特殊講義D」

職員 2 名 参観  
比較文化学科「地域文化研究入門 B」  
職員 1 名 参観

#### ④ 評価

今年度は参観後にフィードバックが得られるようになり、単に見て終わりではなく、参観結果についてのある程度のコミュニケーションが図れるようになったことは進歩である。

ただ、参観者の少なさは相変わらず課題としてある。特に教員は、同じ時間に授業を持っているなど、参観したくてもできないケースも多いが、広報の仕方にも検討の必要がある。

#### 4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度の実施計画に載せた目標は、一通りすべて達成することができた。

しかし、「予定・課題」に挙げた、1) 授業参観の提供授業の少なさ、参観者の少なさ、2) 授業アンケートの手応えを学生にいかにも実感させるか、という 2 点については、今年度もなかなか改善には至らなかった。どちらも抜本的な手直しが必要になるであろうが、今後、学部内のコンセンサスを得ながら進めていきたい。

#### 5 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

来年度以降の予定は、まずはこれまで継続してきた活動を続けていくことが基本である。それぞれの活動を、より有効的により有意義にするための努力、すなわちより地に足のついた FD を目指すことが必要だと思われる。

また、FD の観点も加えてクラス担任の在り方について、共通理解を得ることにより役割および業務の確認あるいは再構築を行いたい。

さらに、来年度には大きなカリキュラム改正があるので、必要であれば、FD レベルでもそれへの対応を考えることになるであろう。

#### (注)「人間学総合セミナー」

2012 年度の人間学総合セミナーは、キャリア形成の在り方をテーマに町田市と提携し、三菱 UFJ R&C のご協力を得て、PBL(Project Based Learning)を行った。具体的には、町田市から提示された課題を 4 つのグループ(Group B, H, M, D)に分かれて分析、検討し、14 回目の授業時に町田市役所の方々に対する解決策のプレゼンテーションを行った。

今回の PBL でのキャリア形成の授業評価として、主体的に課題に取り組む「前に踏み出す力」、課題発見や解決に必要な「考え抜く力」、チーム内で意見を伝える、傾聴するといった「チームで働く力」の 3 つからなる社会人基礎力が身についたかについて 4 件法によるアンケート調査を行った結果、1.95～1.79 と、3 つの力すべてが得られたとの評価結果が出た。授業評価としては到達目標を達成したと言える。

一方、最終的な成果物である解決策に対する町田市や三菱 UFJ R&C の評価と、グループごとの社会人基礎力評価情報との関係を見ると、表 1 に示されるように、PBL(Project

Based Learning)型授業には、一人ひとりの課題発見や解決に必要な「考え抜く力」や主体的に課題に取り組む「前に踏み出す力」を育成した上で、「チームで働く力」の育成を促すことが必要であるということがわかった。

表1 成果物の評価と3種類の社会人基礎力のグループ平均

	成果物の評価	チームで働く力	考え抜く力	前に踏み出す力
Group B	A	<u>1.25</u>	2.00	1.50
Group H	B	<u>2.00</u>	2.20	2.60
Group M	A	2.25	<u>1.75</u>	2.00
Group D	S	2.00	<u>1.33</u>	1.67
平均		1.95	1.79	1.89

## § 農学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現し、さらなる向上を達成するため、大学 FD 委員会と協調しつつ、全ての教員に各種研修会に積極的な参加を促し、教員相互の授業参観を推進する。また、専任教員および非常勤講師は学生による授業評価を実施する。学部内では、主任会の構成メンバーを中心に各教員との情報交換に努める。これらを通して、教員は自らの資質向上に対する意識をさらに高め、農学部として社会に貢献できる卒業生を育成するために組織的な FD 活動を推進する。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生物資源学科主任、生物環境システム学科主任代理、生命化学科主任、学生主任代理、教務主任、および大学 FD 委員の計 7 名が中心となり、目標達成にあたる。

### 3 平成 24 年度の活動内容

#### (1) 研修会

##### ①概要（目的を含む）

学部内での研修会は 1)「液体窒素利用および安全講習会」、2)「高校『生物』の新課程における変更点」、3)「高校『化学』の新課程における変更点」、さらに 4)「農学部生のためのキャリア形成支援プログラムの策定」について、先の構成委員および必要に応じて初年次教育プロジェクトリーダー、環境維持実行委員を加え実施した。1)については、実験・実習において液体窒素を扱うすべての教員を、2)、3)についてはそれぞれの科目の入試作問に関わる全ての教員を、4)については、構成委員と初年次教育プロジェクトリーダー、環境維持実行委員を対象とし実施した。それぞれ授業、入試問題の適正な作問、学生のキャリア活動指導に活用することを目的とした。

##### ②到達目標

1)については、窒素ガスを用いた操作で正しい指導による事故の防止、2)、3)については平成 26 年度受験生に対する適正な試験問題を作成すること、4)については入学時からの学生のキャリア活動への意識改革と大学卒業生として有用な社会貢献を行える資質の付与を到達目標とした。

##### ③活動内容

1)は、窒素の取り扱いおよび未然の事故防止について実務的な解説を行い、現場でのより具体的な操作、処置について講習を受けた。2)、3)は新課程における「理科」および「化学」の学習範囲および学習内容についての変更点が塾講師により項目ごとに示された。4)については、主任会、教授会における農学部としてのキャリア形成支援の考え方とその行程についての中間まとめを目指して意見交換を行った。

#### ④評価

1)については、実験・実習中の不用意な事故防止に極めて有効な結果を得た。2)、3)については、新課程の教育を受けた受験生に対する適正な試験問題作成において作問を担当する教員にとり十分な事前の準備をおこなえる指針を得た。4)については、今後の学生指導上の農学部学士課程教育の指導方針を策定するに当たり極めて重要な所見を得た。

### (2) 学生による授業評価アンケート

#### ①概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部科目担当の全教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、実験・実習、演習科目を除く受講生 10 名以上の講義科目に対し、授業評価アンケートを実施した。

#### ②到達目標

現状の状況把握により講義技法や情報伝達の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に公開することで受験生および関係者に対し、大学の授業の健全性をアピールする。

#### ③活動内容

春semester78 クラス、5,149 名、秋semester61 クラス、4,193 名に対して授業評価アンケートを実施した。

アンケート集計後、結果を各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。また、アンケートの自由記載欄を活用するために原本を各担当教員へ返却した。

#### ④評価

アンケート結果は概ね良好な傾向を示したが、学科間、または、授業間で、各項目に若干の変動がみられ、自由記載を含めた授業改善の一定の方向性を各担当教員に示すことが達成されたと思われる。また、大学 HP で公開するに至り、今後は農学部 HP とリンクし、結果公表に対する内外からの反響の有無とその内容を確認する。自由記述欄の活用について、全体として自由記述が少なく、活用の用を十分なしているとは言えない状況であった。

表. 平成 24 年度の授業評価アンケート集計結果 (3 学科のアンケート実施科目すべて)

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数	
			5	4	3	2	1		
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	19.2%	44.0%	30.5%	5.0%	1.3%	10	
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	10.6%	26.5%	43.1%	15.5%	4.3%	11	
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	31.4%	41.3%	22.2%	3.6%	1.5%	6	
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	36.7%	39.3%	19.5%	3.1%	1.4%	8	
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	31.2%	39.3%	25.6%	2.7%	1.1%	15	
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	38.0%	36.1%	20.1%	4.0%	1.8%	17	
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	34.1%	32.9%	23.1%	6.7%	3.3%	19	
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	26.0%	34.2%	31.0%	6.3%	2.5%	10	
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	31.4%	35.9%	26.3%	4.5%	2.0%	11	
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	33.0%	37.3%	23.6%	4.3%	1.8%	13	
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	38.0%	35.0%	22.8%	2.8%	1.4%	10	
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	21.2%	39.5%	29.1%	7.0%	3.2%	28
		13 授業の内容に興味をもてた	3.8	28.7%	35.5%	27.2%	5.6%	3.1%	32

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数	
			5	4	3	2	1		
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	18.7%	41.6%	32.3%	6.1%	1.2%	4	
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	10.9%	26.6%	43.7%	14.8%	4.0%	6	
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	31.1%	41.8%	23.6%	2.8%	0.7%	9	
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	37.1%	38.4%	21.3%	2.5%	0.7%	7	
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	30.9%	37.7%	28.9%	1.8%	0.7%	16	
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	39.5%	37.0%	20.0%	2.8%	0.7%	20	
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	35.4%	34.8%	23.0%	5.2%	1.7%	9	
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	27.8%	32.4%	32.0%	6.0%	1.8%	12	
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	30.7%	37.6%	27.4%	3.2%	1.1%	9	
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	33.9%	38.4%	22.8%	4.1%	0.8%	13	
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	38.9%	36.1%	22.0%	2.4%	0.6%	9	
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	20.1%	39.1%	30.2%	8.2%	2.4%	16
		13 授業の内容に興味をもてた	3.8	29.7%	35.0%	26.5%	6.4%	2.5%	19

### (3) 教職員を対象とした公開授業

#### ①概要 (目的を含む)

教員の講義力・教育力向上を目指し、教員相互の授業参観を実施した。

#### ②到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。

#### ③活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公開した。授業を公開した教員は 3 学科 2 名ずつで合計 6 名とした。

#### ④評価

農学部としては今回が 3 年目の活動であったが、参観した教員数は極めて少数であった。この活動の定着のためには教員相互の啓蒙的意識の高揚が必要であり、実施に際しての周知、実施方法の検討が要求される。

#### 4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度も昨年度と同様の方式・内容で授業評価アンケートの集計結果を大学 HP により外部公開を行ったが、公開範囲をどこまで広げるかについての検討が必要である。過去の集計結果についての公開は、その目的とする部分の発信側の意志統一と受信側の誤解の発生を防除することを十分に勘案する必要がある。また、アンケート原本を返却することで学生自由記載欄の有効活用を試みたが、自由記述の内容が少なく、また希薄であり十分参考になっているとは言い難い。今後は、学生に対しても、授業アンケートの意義を十分熟知させ、授業改善に対する発言を促す必要がある。

また、今年度も 1 年生の基礎学力を把握するために新入生ガイダンスで高等学校での学習範囲について試験を実施した（生物資源学科；生物、生物環境システム学科；英語、生命化学科；化学）。これにより、基礎学力不足の学生の把握と直接的な指導並びに学力の不足している授業におけるフォローに繋げてゆくことが期待される。

これらの検討課題を次年度以降も継続的に改善を達成する上で FD 活動の充実と発展を目指したい。

#### 5 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

- ・ 新カリキュラムの適切な運営と点検
- ・ 「農学部生のためのキャリア形成支援プログラム」の策定
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 授業評価アンケートの自由記述欄の充実
- ・ 授業評価アンケートの公開方法および範囲の検討
- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加への啓蒙的活動
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取り組みと参加者の増員の施策
- ・ 基礎学力不足の学生の把握と入学後の適切な指導対応
- ・ 大学院 FD 委員会との連携強化

## § 工学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

工学部全教員が TAMAGAWA VISION 2020 を共有して、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

24 年度入学生に適用するカリキュラム改正では、開講科目総単位数を減じ、充実した指導が確保されたカリキュラム構成を適用した。これに続いて 25 年度入学生に適用するカリキュラム改正では、入学生の学力不足対応のため 1 年次には専門科目を入れずに基礎教育を 3 学科共通で用意し、そこで開講される科目の内容の検討・まとめ・実施準備が活動目標となった。16 単位履修上限制（以下、16 単位制）および GPA 警告制度・同卒業要件のもとにおける指導の充実も目標となった。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

平成 20 年度末までは工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動によるものであった。その後はマネジメントサイエンス学科およびソフトウェアサイエンス学科の 2 学科が ISO9001 のシステムの運用を維持している。ソフトウェアサイエンス学科は平成 23 年度のみ同システムを運用しなかったが 24 年度は運用を復活した。機械情報システム学科は平成 21 年度より簡易化した PDCA のサイクルの運用を 24 年度も継続している。

学部としては ISO の活動の有無にかかわらず、FD 活動は学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観など、授業評価総合検討会および主任会、教務担当者会で運営している。

直近の課題が多いため、24 年度は全専任教員参加による工学部 FD 研修会を年 2 回開催した。また、カリキュラム改正関連について課題ごとのワーキンググループが設定されて、活動がなされた。

### 3 平成 24 年度の活動内容

#### (1) 工学部 FD 研修会

##### ①概要（目的を含む）

第 1 回：平成 24 年 9 月 6 日（木） 15:00～17:00

第 2 回：平成 25 年 3 月 14 日（木） 14:00～16:00

##### ②到達目標

第 1 回：○GPA 警告制度関係実施状況分析および今後の対応方針の共有

○16 単位制の有効化へ繋がる自学自習促進対応方針の共有

○カリキュラム改正案の共有

第 2 回：改正カリキュラムによる具体的な指導対応の確認と効果的实施方法の共有

##### ③活動内容

- ・ GPA 新警告制度の状況分析結果の学部全体・各学科・数学・物理について

の報告

- ・ 警告を受けた学生の経過動向の紹介
- ・ 授業評価アンケートの評価と GPA の関係紹介
- ・ 16 単位制およびカリキュラム改正案の説明
- ・ 学外 FD フォーラム等参加報告
- ・ 新 1 年生対象の共通科目の指導方法の説明
- ・ 新規に設置する 3 学科共通科目「導入ゼミ」・「キャリアデザイン」および 1 年次の数学・物理の基礎科目等への学習記録帳の導入に関する説明

#### ④評価

24 年度から適用された GPA 警告制度・改正カリキュラムの実施経過・今後の対応方法とともに 25 年度から適用される 16 単位制・GPA 新警告制度・改正カリキュラム特に導入ゼミをはじめとする新 1 年生対象の共通科目を有効に活用する指導方法の共有をはかることができた。

### (2) 学生による授業評価アンケート

#### ①概要（目的を含む）

工学部では授業内容・方法・スキルの向上等、継続的な授業改善をはかるために、平成 12 年度秋学期より継続して「学生による授業評価アンケート」を実施している。

#### ②到達目標

工学部各学科の全教員全科目について実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改正に役立てる。

#### ③活動内容

24 年度は US 科目の内、工学部 1 年生向けに設定された授業についてもアンケート実施対象として組み入れた。例年通りの方法で実施した。集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに科目担当者に届けられる。集計結果の内容は科目担当者が作成した授業チェックシートとともに科目単位および学科単位で次期の授業に反映されるよう、PDCA を実行する努力をしている。学外には総括した内容を Web で、学内には全ての詳細を学生による授業評価報告書として 8 号館ロビー等で閲覧公開している。公開する報告書に掲載されている科目ごとの集計表には可能な範囲で科目担当者のコメントを記載するようにしている。

#### ④評価

教員、科目とも参加率はほぼ 100%を維持できている。授業評価平均値は安定している。集計結果に対する科目担当者のコメント記載についてはさらに多くの科目担当者が入力し、記載できるよう努力を継続したい。

### (3) 授業評価検討会

#### ①概要（目的を含む）

学生による授業評価アンケートとともに教員自ら授業を評価する科目ごとの

「授業チェックシート」を基にして、学科ごとに実施した「授業評価検討会」の報告を持ち寄って、学部として実施する「授業評価検討会」にて、総合的に検討を加える。検討結果は学部としての改善の実施、および各学科へフィードバックされ、学科における改善の実施に寄与する。

②到達目標

継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。改善成果を評価する。学科として今後必要な改善点を確認するとともに、学部として必要な改善点を提言する。

③活動内容

授業評価検討会実施日：春学期 9 月 18 日、秋学期 3 月 19 日

④評価

授業評価アンケート・授業チェックシート・授業評価検討会によって、授業改善のサイクルが定着している。組織としての活用が継続的課題となっている。

(4) 学習支援

①概要（目的を含む）

主に 1 年生を対象とする基礎学力向上のために実施している数学・物理学の「学習支援」は活用した学生の単位取得率が高い等の効果は表れているが、活用率を向上させることが継続的課題となっている。

②到達目標

- ・ 活用率の向上
- ・ 支援の充実

③活動内容

数学では教科科目の小テスト不合格者指導および再テスト実施と評価の連携を推進した。物理学では高校教員 OB チューターの定年退職後の補充ができずチューター 1 名週 2 日で個別指導可能な範囲に限定して対応した。物理学の学習支援については応用物理学会および工学部紀要にて実施効果を含めて報告されている。

④評価

教科科目との連携により出席率は向上し、出席率が高い程成績上の成果がみられ、支援の充実度は増している。また、教科科目担当教員とチューターの連携・打ち合わせに留意して支援を効率よく行っている。学習意欲が低く出席率が低い学生のモチベーションの向上が課題となっている。ただし、チューターとして適切な高校教員 OB の補充が極めて困難な状況にある。

(5) 発達障害学生支援

①概要（目的を含む）

発達障害あるいは発達障害とみられる学生の入学事例が毎年みられ、対応を模索しながら可能な範囲の支援・指導が続いている。当該学生の学外実習、卒業研究および就労が課題となっている。

②到達目標

当該学生の就労や将来を意識した支援・指導の在り方の目処を立てる。

### ③活動内容

前年の活動を対応可能な範囲で継続している。加えて二次障害を生じないように当該学生の状況の変化にも気を配る対応ことも、可能な範囲で実施している。

### ④評価

対象となる学生の進級・卒業や新入学による指導経験を重ねること、および、学内外の発達障害学生に関わる研修参加によって、指導の在り方に目処が立ちつつある。当該学生の現状と今後や将来を考慮した指導を基本に、インターンシップや卒業研究の指導実績が得られている。インターンシップの受け入れ先の確保、就労に関しては当該学生、父母および保証人（以下、父母等）の現状認識を高める良いきっかけとして捉えて対処することにより、就労に関する父母等の理解と協力が得られる例もあるが、理解が得られない場合の就労指導対処が課題となる。

父母等の意向も様々であり、対応が難しい結果を生じる例もある。

## (6) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

### ①概要（目的を含む）

現状における課題あるいは今後のカリキュラム改正にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を活用する。

### ②到達目標

参加した研修等の内容を活用する。

### ③活動内容

○SPOD フォーラム「学生に深い学びをもたらすために」（主催：四国地区大学教職員能力開発ネットワーク・会場：徳島大学、開催日：平成 24 年 8 月 21～24 日、内容：「大学はどこまで学生を支援するか?」「理工の講義形式授業の中で学生を輝かせるひと工夫」「アクティブラーニングを通して、いかに学生に深い学びをもたらすか」)

○FD フォーラム「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」（主催：大学コンソーシアム京都、会場：立命館大学、開催日：平成 25 年 2 月 23,24 日）、内容：「学生とともにすすめる FD」「キャリア教育の現状と課題」)

### ④評価

工学部 FD 研修会にて参加報告を実施している。必要に応じて、学科会における報告や個別の報告、回覧等により、カリキュラム改正の一部に活用されている。

## 4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

### (1) TAMAGAWA VISION 2020 の実現へ向けた課題

16 単位制、GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、充実した指導の在り方が課題となった。24 年度入学生向けカリキュラム改正に続き、25 年度入学生向けに 16 単位制を活用し工学基礎教育を充実させたカリキュラム改正がなされた。

## (2) 現状における課題

入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が求められている。技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつある。

入学生の学力不足対応指導は高校教員 OB のチューターと専任教員の連携により、年々、指導方法を改善し、成果を挙げつつある。物理の学習支援については毎年学会および工学部紀要に投稿されている。しかし、定年退職されたチューターの補充ができず、物理の高校教員 OB のチューターは本来 2 名で週 4 日対応から 1 名週 2 日に縮小し、支援対象者数を限定せざるを得ない状況が続いた。この 1 名も 24 年度末で定年退職ため、後任の補充をはかったが、再雇用の活発化の影響を受け、達成できず、25 年度は高校教員 OB が不在の状況となる。

また、16 単位制を充実したものにするための対策としては、数学・物理については予習復習の指導時間を設定することになった。また、1 年次の科目ごとに学習記録帳を用意することになった。学部共通で用意する「導入ゼミ」は指導内容をワーキンググループで議論した内容を全教員で強力に指導することになった。

「キャリアデザイン」も学部共通で実施することになった。

発達障害者支援については、現在の環境下での卒業までの対処の在り方に目処が立ってきた。これらの学生にとっては卒業させることを第一の目的として支援するのではなく、将来のためになる方向へ状況が進展するよう支援することが重要である。就労、父母等の理解や、医者との連携（二次障害の防止策等のため）等についてはケースバイケースで対応し、当該学生にとって将来のためになる方向へ状況が進展している例も出てきている。一方、GPA 警告制度下で勉学を継続することへの課題もある。

## (3) FD 活動の在り方に関する課題

当初、参観授業（研究授業）や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が課題となっていた。現況は 16 単位制、GPA 警告制度等への対応に注力し、カリキュラム改正、対応科目の検討準備活動に全力を挙げた。さらに、3つのカリキュラムが併存している状況下でもあるため、参観授業（研究授業）や授業評価アンケートについては課題の認識のみにとどめた。

## 5 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

### (1) TAMAGAWA VISION 2020 の実現へ向けた課題

16 単位制、GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改正カリキュラムのもとで、指導上の課題認識や結果評価を行い、効果的な改善を継続することが課題となる。

### (2) 現状における課題

前項の課題に沿って、入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が求められている。技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつある。いわゆる底上げ対応に力点が置かれざるを得ない状況が続くが、一方で優秀な学生を伸ばす対応も課題となっている。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

現状対応課題が FD 活動の主たる対象である。参観授業や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が継続課題となっている。

## § 経営学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあつて、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、観光経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となつて 2 学科合同の FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

### 3 平成 24 年度の活動内容

- (1) 大学コンソーシアム京都主催 第 17 回 FD フォーラム参加報告

#### ①概要（目的を含む）

5 月 31 日に TAMAGAWA VISION 2020／経営学部 2020 ビジョンに沿つた研修を実施した。今回の総合テーマが「大学におけるキャリア教育を考える ～企業が求める人材つて、大学で育成しないとだめ？～」であつたことから、インターンシップ、留学、国際交流を中心に企業との連携・役割分担を意識した専門教育・キャリア教育の進め方を取り上げた。

#### ②到達目標

- ・大学と企業が協同で実施するキャリア教育の進め方を共有する。
- ・留学支援、国際交流の進展ならびに課題を整理する。

#### ③活動内容

折戸晴雄教授、根木良友准教授による報告に基づいて、キャリア教育・留学支援に関する取り組みと運営上の課題を検討した。インターンシップについては具体的な職種、研修内容までフォーラムの様子について詳しく説明があり、企業が学生と大学に期待することが列挙された。留学、国際交流については、語学力を高めるように支援していることを確認できたが、同時に多くの大学で学生の受入体制の整備が課題であることも共有された。

#### ④評価

フォーラムの大手企業における実践例の紹介があつたため、たいへん参考になつたという意見が寄せられた。現在、経営学部では授業の一環として実施しているが、企業では就職活動と位置づけるケースが増えている。こうした変化が見られるため、授業として実施する場合には準備段階から研修内容、期待される成果を十分に踏まえて運営する体制が求められることを確認した。そのうえで企業と

より緊密に連携を図り、研修前後におけるプログラムをより明確にする必要があることを共有した。

## (2) 講演会

### ①概要（目的を含む）

3月14日に教員研修会として入試動向に関する講演会を実施した。今年度は経営及び観光系学部・学科への受験希望者の動向を共有し、今後の教育課程編成、入学後の学修支援につなげることを主たる目的とした。

### ②到達目標

- ・経営及び観光系学部・学科への受験希望者の動向を知る。
- ・入学前後のアンケート結果から学生支援の方法を提示する。

### ③活動内容

株式会社 KEI アドバンス 竹村俊之氏を講師に迎え、ここ数年の大学進学を取り巻く状況、とくに経営及び観光系学部・学科への志願状況について講演していただいた。受験生へのアンケート結果に基づいて大学進学の実機、入学前後の意識の変化などを伺った。

### ④評価

経済系学部・学科を含めて、社会科学系の学部・学科への入学希望の動向を知ることができた。なかでも受験者数の動向に与える要因について教員の関心が高かった。経営学部としての入試動向に関する研修会は4年ぶりであったため前回からの変化にも関心が寄せられ、質疑応答も活発であった。資料として示された大学入学後のアンケートで、同じ社会科学系の学部・学科であっても、進学した学部・学科によって高等学校時代にもっと学習しておけばよいと考える科目が大きく異なるという点は興味深い。とくに1・2年次の教育課程と授業内容を考えるうえで参考になる。平成25年度入試の結果を含めて、教育課程編成、学生支援のための題材として活用したい。

## (3) 学生による授業評価アンケート

### ①概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。今年度は春学期・秋学期ともに実施した。

### ②到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

### ③活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。マーク式の集計は外部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付してFD活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。記述式は科目担当者が個別に活用している。

### ④評価

学修時間をアンケート項目の1つとして設定しているが、集計結果から学生の

学修時間が少ないことが読み取れる。自学自習を働きかけるなど、引き続き検討すべき課題といえる。平成 25 年度からシラバスの様式が変更になることから、よりきめ細やかな学修支援につなげることが考えられる。

#### 4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度の予定は概ね達成できている。

上記の活動に加えて、学外セミナー等への参加も例年どおりであった。野村尚司教授、山田雅俊准教授が 2 月 23・24 日の 2 日間、立命館大学で開催された第 18 回 FD フォーラム（大学コンソーシアム京都主催）に参加した。平成 25 年度の研修会で参加報告と討議を予定している。

全学的な取り組みである授業参観も予定どおり実施した。今年度の授業参観は秋学期に開講している 6 科目と昨年度に比べて多くの授業を設定した。参観人数の増加と参観後の取り組みは継続的に検討する事項としてあげられる。

昨年度、授業評価アンケートのあり方、とくにアンケート結果の活用方法を課題の 1 つとして掲げていた。この点について学部・学科として十分に検討することはできなかったものの、現在、各教員個別の FD として学生へのフィードバックを行うといった取り組みも行われている。こうした取り組みが広がり、さらに学部、学科、コース等での活用方法を検討できれば、より幅広くアンケートを活用できるであろう。

経営学部 2020 ビジョンに基づく学生支援の一環として、今年度から学習支援室における学修支援、検定試験合格助成制度を開始した。すべての学年の学生が利用している。自学自習を促すなかで学習支援室の利用を引き続き働きかけるとともに、検定試験合格助成制度のさらなる活用が求められる。

観光学部設置申請にともなう観光経営学科の学生募集停止があったことは昨年度までと大きく異なっていた。新入生は国際経営学科のみであるが、経営学部教育課程のさらなる充実に向けて教育内容の検討を続けるなどした。今年度の検討結果を平成 25 年度以降の学部運営に生かしたい。

#### 5 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

まず平成 25 年度春学期には FD フォーラムのシンポジウム及び分科会の報告を含めた研修会、秋学期には講師を招聘した研修会を予定している。春学期・秋学期に授業評価アンケートも例年どおり実施する。

平成 25 年度以降の複数年度にわたって、国際経営学科におけるコース制と観光経営学科における履修モデルの定着のための支援を進める。国際経営学科では平成 25 年度には翌年度（3 年次）から希望するコースの選択が始まる。2 年次に配当しているコース別科目と専門基礎ゼミを中心に学修の成果をコース選択につなげることができるように支援する。観光経営学科では 1 年次の導入科目を基礎として、ツーリズム、ホスピタリティの 2 つの履修モデルを想定した 2 年次・3 年次配当科目を履修・修得できるように支援する。そのためのコース別または履修モデルに沿った FD を展開する。

平成 25 年度は 1 年次から学生（国際経営学科のみ）のコース選択等について、さらに踏み込んだ学修支援を検討する。たとえばコースを選択する時期だけでなく、入学時から定期的に希望状況を把握することなどを予定している。入学時にコースを決めている、当面は特定のコースに限定せず、広く経営分野のさまざまな科目を学びたいと考えているなど、学生個々人のさまざまな志向が想定されるためである。こうした取り組みによって、より効果的な学生・学修支援が期待できる。

経営学部 2020 ビジョンでも掲げたように、担当科目数等の調整を含む教育活動と研究活動のバランスを考慮した FD の推進が求められる。引き続き学部全体で取り組む課題である。

## § 教育学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

本年度の FD 活動への取り組み理念・目標は、平成 23 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、大学・学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。」

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 委員（教務担当兼務）、通信教育部長、通信教育部教務主任、FD 委員の 8 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 委員会が学部における FD 活動計画(企画・運営)の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また、委員会決定事項を教授会への議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

### 3 平成 24 年度の活動内容

#### (1) 研修会等

##### 【通学課程】

#### 1) 自校史教育および南さつま市との教育交流、全人教育研究交流の研修

##### ①概要（目的を含む）

平成 22 年より鹿児島の小原國芳生誕地等を巡りながら自校の歴史や建学の精神を学ぶことを目的とした新規採用教員等対象の鹿児島 FD 研修を実施してきた。平成 24 年度は、本学と包括協定を締結した南さつま市、南さつま市教育委員会との教育交流を加え、教育現場の視察を通して玉川教育および教育学部の教員・保育士養成教育の課題を明らかにすることを目的とした。また、ドイツからの研究生（研究分野：全人教育）も同行し、世界的な教育動向からとらえた玉川教育の全人教育の意義についての討議をする機会とした。

##### ②到達目標

- ・創設者小原國芳の生誕の地を巡りながら、玉川大学の建学の精神を確認し、参加した教員同士が学び合い、参加者各自が今後の教育活動、研究活動の活性化を図る。
- ・南さつま市役所、南さつま市教育委員会との教育交流を通して、連携の推進を図る。
- ・学部内での報告会を行い、学部教員の玉川教育への士気を高め、教員・保育士養成における授業内容の改善や学生指導に反映させる。

##### ③活動内容

- ・鹿児島県南さつま市坊津町久志などの実踏研修および南さつま市役所、教育委

## 員会との交流研修

宿泊研修 : 平成 24 年 7 月 15 日 (日) ~17 日 (火)

参加者 : 専任教員 8 名と研究生、石橋哲成理事の計 10 名

研修内容 : ・鹿児島県南大隅町 (電信所跡地・前田邸) の視察  
・枕崎市桜山小学校の視察  
・学園附設 久志農園 視察と職員との交流  
・南さつま市生誕地メモリアルパークの見学、廣泉寺での墓参  
・南さつま市久志小学校、久志高等学校跡の視察  
・南さつま市役所 表敬訪問と交流  
・南さつま市立坊津学園 (小中一貫校建設中) 視察  
・南さつま市立長屋小学校 授業参観と教員交流

### <研修参加者の報告内容>

以下、研修に参加した教員の聞き取り調査の内容を抜粋し、列記する。

- ・研修当日以前に「全人教育」に関する資料が石橋哲成先生より配布されたこと、また、バスでの移動時に詳細なお話を伺えたことで玉川教育の理解を深めることが出来た。
- ・今回の FD 研修は、改めて玉川の歴史の重みを深く感じさせられる、大変有意義な研修であった。今回、学園の一員として、研修に参加できたことを誇りに思う。
- ・小原國芳先生のご足跡や思いを理解する本当に充実したものとなった。
- ・自身の玉川での研究、教育活動を振り返る機会になり、より精進しようと考えた。
- ・小学校の授業参観を深めた教育視察は、今後の教育活動の参考になった。
- ・教育現場との交流は教育の一端を垣間見る機会として有意義であった。
- ・参加した教員・研究生との情報交換討議が、玉川教育、全人教育の理解を深めることになった。
- ・包括協定を提携した南さつま市の職員の方との交流は、具体的な連携となり、今後の発展に結び付いたと考える。
- ・今回、南さつま市役所、南さつま市教育委員会の方と現地を回ったことで新たなる史実や現存する史物を発見することになり、玉川教育や小原國芳研究に関する視点を見出すことが出来た。

### ④評価

次の 2 点において、目標の達成ができたと評価する。

- ・研修に参加した教員の聞き取り調査の内容から、玉川教育および全人教育への理解を深めること、また、それぞれの教育活動の改善や研究活動の発展に反映することができたと評価する。
- ・今年度より実施した南さつま市 (市役所・教育委員会) との交流事業は、実質的な教育連携となり、今後の連携を模索する一助となったことから評価に値すると振り返る。

## 2) 自校史教育の報告会を通しての学部内研修

### ①概要（目的を含む）

自校史の理解促進、全人教育研究の推進、および南さつま市との教育連携のあり方を模索することを目的とする研修の報告会を実施し、学部教員が教育・研究課題を共有する。

### ②達成目標

- ・自校史を再確認し、各自の研究・教育活動に反映させる。
- ・包括協定を締結した南さつま市との教育交流の在り方を模索する。

### ③活動内容

日 時 : 平成 24 年 7 月 18 日 (水) 学部教授会終了後 (45 分)  
報 告 者 : 研修参加者代表 朝日公哉 (教育学部 助教)  
内 容 : 報告・質疑応答・意見交換

### ④評 価

現地での玉川教育および全人教育の研修により、新たな研究の視点が見出されたことが共有されたこと、また、包括協定を締結した市役所や教育委員会との交流が実質的な教育連携となったことを共通理解することとなり、今後の連携のあり方を模索しようとの意見が出され、連携の士気が上がったことが確認されたので、学部内研修の目的を達成することができたと考える。

## (2) 調査等

### 1) 初年次教育の在り方と基礎学力の保障と向上に関する研究

#### ①概要（目的を含む）

学士課程教育の基礎となる「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」における教育内容と方法の検討を行い、学士力の向上を目指すものとする。また、学士として、また教職課程を受講する者としての基礎学力の保障と向上に関する研究を行う。

#### ②到達目標

- ・「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」における教育内容と方法の改善をし、25年度の教育内容に反映させる。
- ・教職課程を受講する者としての基礎学力の保障と向上に関する研究を促進させるためのデータ収集と新教育課程における修学方法の模索を図る。

#### ③活動内容

- 「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」における教育内容と方法の改善
  - ・1年次担任による研究会の実施：春学期・秋学期共に3回 計6回  
テーマ：・教育内容と方法の検討
    - ・入学直後の学生指導としてのクラス交流教育の在り方について
- 教職課程を受講する者としての基礎学力の保障と向上に関する研究
  - ・基礎学力テスト（数学）の実施とデータの収集を重ねる。
  - ・新カリキュラムにおける「自然科学アカデミックスキルズ（リーディング）」、「自然科学アカデミックスキルズ（ライティング）」、「人文科学アカデミックス

キルズ（リーディング）」での教育内容の検討と実績検証をする。

#### ④評価

平成 25 年度の教育内容が以下のように改善がなされることとなった。改善の評価は次年度末以降になるが目標の一部は達成されたと考える。

- 「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」における教育内容と方法の改善
  - ・これまで宿泊研修で行ってきた学生指導、クラス交流の在り方を検討し、日曜日を利用した研修をクラス毎に企画し、実施することとした。成果については 25 年度終了時に評価する。
- 教職課程を受講する者としての基礎学力の保障と向上に関する研究
  - ・各種「アカデミックスキルズ」の授業内容の工夫を検討した。成果の検証は 25 年度以降に評価する。

### 2) 二年次教育の在り方についての研究

#### ①概要（目的を含む）

二年次教育として位置づけている「キャリア演習Ⅰ」、「キャリア演習Ⅱ」のキャリア形成にかかわる教育内容と教育方法の検討を行う。キャリア形成にかかわる研修については、卒業生を登用したガイダンスの在り方と学士力として求められるコミュニケーション能力の育成を図ることとした。また、教職に就く者として求められる自然・野外活動体験の保障に関する研究を行う。

#### ②到達目標

- ・キャリア形成にかかわる卒業生ガイダンス内容の改善を図る。
- ・2 年次秋に実施している宿泊研修の改善を図る。

#### ③活動内容

2 年次担任による研究会を実施：春学期 3 回、秋学期 3 回

##### ○キャリア形成にかかわる卒業生ガイダンス内容の改善の会議

<改善の視点と実際>

- ・キャリアガイダンス実施方法の改善（双方向的なガイダンスの実施、講義後のフリーディスカッション時間の確保）。
- ・キャリアガイダンス実施後のアンケート調査（受講学生）の実施。
- ・キャリアガイダンス実施後の卒業生講師と教員の振り返り時間の確保。

##### ○2 年次秋に実施している宿泊研修の改善の会議

<改善の視点と実際>

- ・活動の振り返りに使用するムービーの作成と振り返りの実施。
- ・活動内容の評価に関するアンケート（参加学生および引率教員）の作成と実施。

#### ④評価

会議での討議結果を経て、実施方法の改善を試みることができた。アンケート調査については集計し、課題の共有を図ると共に、関連する研究を行っている教員の研究データとした。また、25 年度の活動への改善の視点をも見出すことができ、一定の成果が得られたと考える。

### (3) 学生による授業評価アンケート

#### 【通学課程】

##### ①概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）の内容の検討、実施の促進を図るとともに、実施後の活用方法を検討する。また、実施後の集計を外部委託し、さまざまな分析が可能なデータの集積を進める。

##### ②到達目標

- ・平成 25 年度からの新カリキュラムを見通してリフレクションシートの改訂を図る。
- ・専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを積極的に実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善につなげる。

##### ③活動内容

- ・平成 24 年度秋学期からの授業評価アンケート（リフレクションシート）の改訂を行った。
- ・平成 24 年度秋学期より、専任教員、非常勤講師が担当する教育学部のすべての授業での授業評価アンケート（リフレクションシート）を実施した。

##### ④評価

秋学期に授業評価アンケート（リフレクションシート）の改善を行うと共に、調査対象を非常勤講師による授業にも拡大した。実施率が広まったと共に、アンケート集計の外部委託数もかなり増えた。評価結果の公表についての検討が今後の課題として残るが、学部全授業を対象とする足がかりを付けることができた点は評価に値すると考える。

#### 【通信教育課程】

##### ①概要（目的を含む）

平成 24 年度夏期スクーリングにて担当する全教員の授業において授業評価アンケートを実施し、教員の教授内容・方法等の検討を行い、授業改善を目的とする。

##### ②到達目標

- ・夏のスクーリングにてアンケートを実施し、平成 24 年度 3 月号の『玉川通信』にてアンケート結果を公表する。
- ・集計結果をもとに教員の授業改善を図る。

##### ③活動内容

- ・夏期スクーリングを受講した 761 名の学生にアンケートを実施した。
- ・実施したアンケート調査は、通大全体への不満、要望含め、『玉川通信』3 月号にて、学部長名での報告として開示した。
- ・アンケート結果を各教員に戻し、今後のより良い授業の展開に向けての参考資料とした。

#### ④評価

計画を実施し、到達目標に達することができた。

### (4) 教職員相互の授業公開と参観

#### 【通学課程・通信教育課程】

##### ①概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また、関連する科目の教授内容の調整を検討する機会ともする。

##### ②到達目標

大学 FD 委員会の提案に合わせて、通学課程は 5 名の教員が、通信教育課程は 1 名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るととともに、参観した者の授業改善へも寄与する事業とすることとする。

##### ③活動内容

通学課程は教育学科の教員 2 名、乳幼児発達学科の教員 3 名の協力を得て、5 つの授業を、通信教育課程は 1 つの授業において授業公開と参観を行った。

##### ④評価

通学課程は、新任教員を中心に授業参観を、通信教育課程は熟練者の授業参観を実施したが、設定時間や周知方法の問題から、参観者が非常に少なかった。今後、時間の設定の方法、実施の在り方についての再検討が必要だと思われた。

### (5) TAMAGAWA VISION 2020 の展開に伴う新教育課程と履修方法の検討

##### ①概要（目的を含む）

教育学部の教員が TAMAGAWA VISION 2020 を共有し、その課題に向けて教育環境と内容の改善を図ることを目的とする。

##### ②到達目標

教育学部の使命とする教員養成、資格取得にかかわる法的な根拠を踏まえつつ、本学の私学としての独自性を活かした展開を試みる新しい大学の在り方の中で、いかに教育活動を展開するかを検討することとする。

##### ③活動内容

- ・ TAMAGAWA VISION 2020 の第一歩となる、大学全体の教育システムの改善となる「16 単位履修上限の導入」に伴う教育職員免許状の取得カリキュラムの運用について討議を重ね、カリキュラムマップの作成を試みた。
- ・平成 25 年度入学生の新カリキュラムの 1 年次の履修方法を具体的に探ると共に、履修上の課題、修学上の学習課題を討議した。

##### ④評価

今年度の活動はいずれも継続審議となるが、審議の過程で教育学部の教員全員が TAMAGAWA VISION 2020 への課題を共有できたこと、また、学部のアドミッションポリシー (AP)、カリキュラムポリシー (CP) を再確認し、再構築する足がか

りを作ることができたことは、高く評価できることである。

#### (6) 学外セミナー等への教員派遣

##### ①概要（目的を含む）

教育学部の FD 活動の促進を図るため、外部機関が開催する研修会、フォーラムに参加し、外部の動向を把握する。また、外部動向については教員研修会、教授会などで報告し、共通理解を深める。

##### ②到達目標

公益財団法人 大学コンソーシアム京都主催「第 18 回 FD フォーラム」、または、京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第 19 回大学教育研究フォーラム」に参加し、他大学の先駆的な教育活動、FD の実践の情報を収集し、学部の教育改善、FD 活動に寄与するものとする。

##### ③活動内容

平成 25 年度入学者の教育課程の調整と履修指導の方法、履修システムの構築に関する研究に時間を要し、2 月、3 月の時点で学外セミナーの派遣に至らなかった。

##### ④評価

学外セミナーへの派遣ができず目標の達成ができなかったため、学外の FD 動向を収集するためにも、次年度以降の計画を再構築する必要があると考える。

#### (7) その他

##### 【通信教育課程】

##### 1) 卒業論文に対する指導法の改善

教務担当を中心とするワーキンググループを作り、より良い卒論指導法や単位認定のあり方等々について論議した。

#### 4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

ここ数年の課題として上げ、また、23 年度には重点的課題として取り上げた「教育学部 授業リフレクションシート」の全科目（専任・非常勤）の実施に踏み切ることができたことは大きな成果である。また、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD については、当初予定していた内容とは異なったが、平成 25 年度から施行となる新教育課程における、カリキュラムツリー、カリキュラムマップ作り、具体的な履修指導の検討へと変更し、新しい教育環境づくりに学部全体が共通認識をもってかかわることができた。同時に、本学の長い歴史と実績のある教員養成課程をどのように再構築し、いかなる教員を養成するかを深くする機会を得た。合わせて今後の学部運営の在り方についても教員一人ひとりが各自の専門分野の研究活動と連携させながらいかに協働するかについての問いも投げかけられ、活発な意見交換がなされた。平成 23 年度の課題を十分に達成したとは言いきれないが、時間の流れの中で、学部が直面する問題について議論し、課題の共有認識がなされたことは大きな収穫であった。

## 5 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

平成 24 年度に引き続き、本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任を果たす自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用についての模索を重ねることが課題となっている。また、教育学部の使命としての教育・保育専門職業人の養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える人材輩出のための教育実践を促進し、教員・保育士の採用率を上げることも大きな課題となる。日常の教授内容と方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づくも、今日の社会の要求に応じることのできる人材の育成に取り組むことが重要であると考え。25 年度入学者より、授業と単位の実質化を図った教育課程が展開されたため、それに応じた教育活動の展開方法の研究と学びの質保障の検証も大きな課題となる。

また、教員の職務のひとつとなる研究活動の活性化にも学部挙げての努力が必要であり、今後は大学における教育実践と研究活動とを関連付けた FD 活動も推進しなくてはならないと考える。合わせて、昨今、初等・中等教育の現場では、ICT 教育機器を駆使した授業展開も進んできたことから、大学における ICT 機器を活用した授業実践の取組、教育現場との共同研修も大切な視点となると考える。

## § 芸術学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化などによって予測が困難な時代となっている。このような時代にあっては、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討し、柔軟に対応していく必要がある。世論調査によると、国民の60%が世界に通用する人材や企業、社会が求めている人材を大学は育てているかの質問に否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離している。必要とされる大学となるためには、未来を築くための教育や研究に大学が総力を挙げて取り組み、社会に貢献することが使命である。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や想像力などの育成と深くかかわる。また、従来の教育や福祉に加えて、芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら教育体制や教授法、研究戦略などに対して PDSA を用いて改善をおこない、柔軟性、機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。そのためには次のような4つの目標が考えられる。①情報を現実のものとして把握する具体的な行動、②得た情報から問題や課題を発見する複眼的な分析、③発見した問題や課題を共有し、教員個々人の問題や課題とする仕組み、④問題や課題を解決するチーム力の形成が重要だと考える。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会で情報の共有や分析をおこない、目標や課題の設定、及び手段などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーや FD 委員はもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果、及び方策等を拡大教授会で報告し、全学部教職員の組織的な取り組みとする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD 中核メンバーであるので、学科内の取り組みをまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。大学 FD 委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達、及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、情報などの共有を図り FD の組織的活動が円滑におこなわれる役割を担っている。

### 3 平成 24 年度の活動内容

(1) 講演会の開催 - 教員の FD に係わる授業成果向上を目的とする

#### ①概要 (目的を含む)

芸術学部の授業成果向上 (質の保証を見据えて) を目的とした講演会を行う。これによって本学部の教員による新たな教育プログラムのあり方を議論し、教師力の向上を促すと共に、基礎となる情報として文化産業立国に関わる政策とその成果、及び異領域の融合 (芸術と経営) の実例と研究成果を知る。

## ②到達目標

玉川大学芸術学部の教育目標を達成することを目的とした教員の教師力向上のための啓発を目標とする。

## ③活動内容

下記の日程で講演会を開催した。

実施時期： 11月11日（日）コスモス祭芸術学部講演会

場 所： 本学視聴覚センター101教室

テ ー マ： ジャパンアーツのソフトパワーが日本を元気にする！

『文化産業立国とドラッカーの経営学』

1. 「日本の粹／芸術と経営—ドラッカー夫妻の美的世界観—」

講演：村山元英 シアトル大学特別招聘教授

2. 「日本文化産業のポテンシャル」

講演：玉井日出夫 玉川大学芸術学部教授

司会：小倉康之 玉川大学芸術学部准教授

## ④評価

本学の教職員、学生を含む約100名が参加した。日本文化における潜在的な能力、また国際的な共通性について考察がなされ、今日的な課題に対する教員の資質能力の向上を図る方策にも及んで論説が展開されたことは意義深かった。

## (2) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

### ①概要・活動内容（目的を含む）

平成24年度は予定通り年2回の授業アンケートが、芸術学部で開講されている全ての授業について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データのすべてを、Blackboardを通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータを伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書を作成し、提出する。

### ②到達目標

芸術学部FD委員会においては、授業アンケートのデータを子細に分析し、今後のFD活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容・形式の妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な教育連携を可能とする。

### ③評価

本年度も昨年度に引き続き、2年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有し、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果報告を紹介するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

### (3) 学外セミナー等への教員派遣

#### 1)

##### ①概要（目的を含む）

第49回全国高等学校美術、工芸教育研究大会 2012 岡山大会への教員派遣。高等学校教諭との交流および研究会参加による教師力向上、及び高等学校の教育現場の現状を調査し、高大連携の方策を立案する基礎資料とする。

##### ②到達目標

高等学校における芸術教育の現状、問題意識についての理解を深める。その上で、大学における芸術教育のあり方を見直し、高校から大学への発展的展開を考え、高大連携授業を有意義なものにしてゆく。

##### ③活動内容

上述の研究大会において実施された講演会、パネルディスカッション、研究分科会に参加し、高等学校における美術科指導法についての知見を得た。

##### ④評価

本学からは小倉康之准教授・高橋愛助教の2名が参加した。それぞれ研究会や懇親会などに参加し、多くの高校教員と意見交換を行うことができた。今後、高大連携の教育プログラムを展開していく上で、極めて重要な知見が得られた。

#### 2)

##### ①概要（目的を含む）

第2回関西芸術系大学教育視察研修を企画し、以下のメンバーで実施した。  
中村慎一芸術学部長、橋本順一芸術学部施設設備管理運営委員会委員長、小倉康之メディア・アーツ学科主任代理、田中敬一教授、赤山仁准教授、藤枝由美子准教授、丸山松彦助手。

目的は、造形系コンピュータ施設・施設の運用、及び管理体制や造形系CG、映像、デザイン教育の指導體制の調査。

##### ②到達目標

関西地区造形芸術系大学における現状、指導體制を調査し、報告書としてまとめ、学部所属教員で情報を共有し、本学部のコンピュータ施設・設備管理運営とコンピュータ教育、映像、デザイン、MyPC推進などの教育に生かす。

##### ③活動内容

実施時期：9月14日（金）～ 9月15日（土）

訪問先：神戸芸術工科大学、京都精華大学

受入担当：各学部長、センター長、主任教授等

##### ④評価

上記2大学を訪問し、コンピュータ施設の設備とその運用、管理体制についての説明を受けた。また、映像やデザイン教育の指導體制の調査を行い、多くの知見を得た。管理運営体制の再構築、合理化案策定に関し、多くの具体的な情報を得ることが出来た。

#### (4) 調査・研究など

##### ①概要（目的を含む）

授業研究誌の発刊。ビジュアル・アーツ学科の科目担当教員による、授業内容の紹介。科目間の連携・連動や授業改善に役立てることを目的とする。2011年度刊行したものから ISSN コードを取得した。

##### ②到達目標

教員間で授業の内容を確認し、それぞれの担当授業の向上に反映させることを主な目標とする。また、実施内容の反省に基づき次年度以降の学科運営のための指針とする。

##### ③活動内容

ビジュアル・アーツ学科開設の授業内容をまとめた研究誌を年度単位でまとめ、刊行している。2011年度には学科の基幹科目である専門実技系の科目と研究系科目である芸術演習についてそれぞれの科目担当者が執筆した。2012年度は、玉川大学芸術学部の特徴ある科目としての実践型プロジェクト系科目「エキジビション」「海外特殊研究」「特別講演会」についての内容をまとめた。

#### 4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

- ・芸術学部の授業成果向上を目的とした講演会を予定通り実施することができた。また、アート・スタンダードの学習プログラムも軌道に乗り、ネットワーク上での検定試験が既に運用されている。
- ・今年度も昨年度同様、全ての科目において、同じフォーマットによる授業評価アンケートを実施することができた。昨年度は、震災の影響で秋学期のみの実施となったが、今年度は春、秋、両学期において行うことができた。併せて授業成果報告書集の発行も行い、各自の授業点検と情報の共有に努めた。
- ・高大連携授業を意義深いものとし、大学における芸術教育の目的を明らかにするため、全国高等学校美術工芸研究大会などへの参加を促してきたが、本年度も教員を2名派遣し、詳細な報告書を作成した。
- ・大学 FD 委員会主催の研修会については、欠席者にも当日の資料等を配付し、拡大教授会において研修会参加者と大学 FD 委員がそれぞれの研修の意義と概要を報告した。大学としての FD 活動に関する様々な情報と問題意識を共有できた。

#### 5 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

- ・全ての科目において、同じフォーマットのアンケート調査を予定通り行うことができた。平成 25 年度以降も、春学期、秋学期、年 2 回の実施を予定している。アンケート結果の公表方法については引き続き議論を重ね、より良い方向性を見出していきたい。
- ・芸術学部ではそれぞれの授業における学習成果を相互に参観することを推奨してきた。パフォーミング・アーツ学科は青山円形劇場、メディア・アーツ学科はデジタル・プラネット Music Japan TV および相模原・町田大学コンソーシアム、ビジュアル・アーツ学科は町田市立博物館などと産学連携を進め、学内教員のみ

ならず、学外者による授業参観を実施してきた。今後もそうした授業成果報告、公開発表会を積極的に行い、カリキュラム改革・授業改善のための環境作りを進めていきたい。

- 年度末に専任教員と非常勤教員のコミュニケーションと教育目標の確認を目的とした研修会・親睦会を実施した。全体会では、学部の教育目標と、今後のFD活動についての講演を行い、その後、学科ごとに改善すべき点について議論した。芸術学部にも所属する専任教員と非常勤教員が一同に会することで、情報の共有を図ると共に緊密な教員連携の基礎となるコミュニケーションを深めて次年度に向けて様々な情報を共有することができた。平成24年度も同様の研修会・親睦会を計画中である。また、こうした交流の機会をさらに広げる方向で議論を進め、専任と非常勤が一体となった教育力の充実を図っている。

## § リベラルアーツ学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。  
学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。  
大学 FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。  
FD 研修会担当…学部で実施される専任教職員向けの FD 研修会についてコーディネートする。  
※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

### 3 平成 24 年度の活動内容

#### (1) 初年次教育の方向性に関する研修会（ディスカッション）

##### ①概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、来年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育そのもののあり方についても意見交換をする。

##### ②到達目標

来年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善すること。

##### ③活動内容

1 年次研修の 2 日目である 2012 年 6 月 1 日（金）10:00～12:00 に、ザ・プリンス箱根にて実施した。参加者は 1 年生担任教員の他、主任会の教員を含めた 10 名であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

i) 「一年次セミナー101/102」と「リベラルアーツセミナー I / II」の有機  
的連携について

ii) 1 年次研修の研修先（現行：箱根）と研修（フィールドワーク）内容の再  
検討について

両項目とも活発なディスカッションがなされた。特に ii) については、様々な条件を考えると現状では箱根が適した研修先であることが確認されたが、2013 年度より日程に土曜日が含まれるため、現地でのフィールドワークのあり方に関しては観光客への影響を最小限にするための考慮が必要であることが併せて確認された。

##### ④評価

検討内容を実践に反映させるのは 2013 年 4 月となるため、実質的な評価はそ

れ以降になるが、リベラルアーツ学部の初年次教育の要ともいえる1年次研修の内容について一定の問題意識を共有できたため、現時点での暫定的な目標達成はできたと考えられる。

## (2) 2012年度リベラルアーツ学部防災訓練

### ①概要（目的を含む）

学部専任教職員の防災意識を高めると同時に、災害発生時に迅速かつ適確な対処ができるよう、必要な知識を確認し、具体的な避難手順を実践的に理解する。

### ②到達目標

災害発生時の迅速かつ適確な対処ができるようになること。

### ③活動内容

2012年7月26日（木）15:00より、第2大学研究室棟にて実施した。訓練には15名の専任教職員および2名のパート職員が参加し、キャンパスセキュリティセンターによる指導の下、以下の内容が実施された。

#### 【1次訓練】災害発生時の流れの確認（内容は以下の通り）

- ・学生への安全確保指示
- ・非常放送設備前への教職員集合、および次段階指示の判断
- ・非常放送設備による指示周知
- ・1次避難場所の確認及び避難経路の確認
- ・災害対策本部との連携

#### 【2次訓練】消防設備機器の使用訓練（内容は以下の通り）

- ・火災発生時の対応方法（内線99の活用）
- ・消火器使用方法（水消火器による消火訓練実施）
- ・屋内消火栓使用方法

### ④評価

定量的な評価は実施していないが、訓練後に参加教員からの意見を聴取したところ、災害発生時の具体的な流れを具体的に理解できただけではなく、災害対策本部と部処との指示連絡系統の問題点を認識することができたという意見が多く聴かれた。したがって到達目標は概ね達成されたと評価できる。

## (3) 2年次フィールド研修（東日本大震災・被災地ボランティアプログラム）のための視察会

### ①概要（目的を含む）

「キャリアセミナー」の一環としてボランティアプログラムを導入するために、東日本大震災の被災地を視察し、現状とニーズを把握した上で、2年次の学生が広義のキャリアを考える上で必要なボランティアプログラムを具体化する。

### ②到達目標

来年度以降の2年次「キャリアセミナー」へ効果的なボランティアプログラムを導入すること。

### ③活動内容

2012年9月14日・15日の2日間、専任教員6名が陸前高田、気仙沼、女川、石巻、東松島、若林、名取の各地区を視察するとともに、現地の関係者から被災地の現状とニーズについて話をうかがった。

④評価

参加者の話によると、被災地の人々は、震災から一定期間経過した今だからこそ様々な人に現地へ訪れてほしいと願っており、どのような形であれ学生が被災地へ赴く意義は小さくないとのことであった。具体的なプログラムの展開は2013年度からであるため、本来的な評価はできないものの、被災地の現状とニーズを把握できたことは高く評価されてよいと思われる。

(4) 2012年度リベラルアーツ学部FD研修会

①概要（目的を含む）

TAMAGAWA VISION 2020に対応した学部の将来構想（特に教育カリキュラム）について、専任教職員が情報を共有するとともに、カリキュラム、教育方法、到達目標などの検討を行う。

②到達目標

新カリキュラムの進め方を教職員が確認し、到達目標や指導方法等の大まかなあり方について認識を共有すること。

③活動内容

2013年2月7日・8日の2日間、箱根の湯本富士屋ホテルを会場とし、専任教職員約20名（次年度からの新任教員を含む）による研修会が実施された。主に以下の項目について、参加者による報告・質疑応答・ディスカッションが行われた。

【2月7日】TAMAGAWA VISION 2020に対応した学部の方向性について

- ・学部・学科・メジャー・カリキュラムの再検討
- ・開講単位数の削減
- ・教職課程のあり方

【2月8日】学部全体で取り組む「玉川学」プログラムについて

- ・他大学・他地域で展開されている地域学について
- ・「玉川学」の教育への還元方針について

④評価

TAMAGAWA VISION 2020に対応した学部・カリキュラムの方向性については、現状からの移行にともなう様々な問題点について活発な議論が行われ、特に本学部の存立基盤である7メジャー制や「広く・深く学ぶ」カリキュラムの維持が困難であるということに関しては参加者全員の認識が共有されたと思われる。それに対する具体的な対策案はまとまるに至らなかったものの、問題認識の共有が達成されたことは一定以上の評価に値するのではないだろうか。

(5) 1年生を対象とした本学部入学プロセス等に関する面接調査

①概要（目的を含む）

1年生の入学プロセス等を個別に自由面接調査法により把握し、今後の受験者獲得に資するニーズ等を明らかにすることを目的とする。今年度はパイロット調査として、1年4組（担任教員：小山雄一郎）を中心に実査を行った。

#### ②到達目標

1年生の入学プロセス等の大まかな傾向を把握することにより、受験者獲得に資するようなカリキュラム改善のヒントを得ること。

#### ③活動内容

2012年10月から2013年2月にかけて、1年4組を中心に、学生1人1人に対して自由面接調査を行い、本学部の選択・入学に関するプロセスをたずねた。その結果を記録した上で、そこに見られる大まかな傾向を分析した。主要な知見は以下の通りである。

- ・概数ではあるが、概ね1/3の学生が教職課程（中学・高校の英語または国語）を目的として本学部を選択しており、残り2/3の学生が自身の「やりたいこと」を決めきれないことを理由に本学部を選択していた。
- ・一般入試による入学生の多くは、本来の志望校に合格しなかったために本学部へ入学していたが、偏差値の高い他大学にも合格しながら、教育理念やキャンパス環境に魅力を感じ、敢えて本学部へ入学した者も若干名見られた。
- ・推薦入試およびAO入試による入学生の多くが、本学の教育理念等をよく知る家族・親族、教員等の薦めがきっかけとなり、応募するに至ったとのことであった。

#### ④評価

以上の結果からは、i) 教職課程プログラム、ii) 充実した学際的プログラム、iii) 全人教育を中心とした独自の教育理念に力点を置いたプログラム、という3点が、本学部における受験者獲得のために重要ではないかと推察される。パイロット調査ではあるが、これらを把握できたことにより、目標は概ね達成されたといえる。

### (6) 学生による授業評価アンケート（Bbを利用）

#### ①概要（目的を含む）

学部教員がよりよい授業を展開するために、学部コア科目・学部導入科目・発展科目を中心とした科目群に関する学生の意識・行動をアンケート形式（自由記述を含む）で把握する。

#### ②到達目標

アンケート結果を鵜呑みにするのではなく、客観的に有用と思われる結果を教員が参考とし、それを今後の授業改善へ具体的に活かすこと。

#### ③活動内容

2012年度秋学期終了後、学部コア科目・導入科目・発展科目の主要な履修生であり、かつ新カリキュラムの適用対象である1年生を対象とし、40問程度の間設に対して5件法および自由記述にて回答してもらった。実査はBbを通じて実施され、有効回答率は約33%（2013年3月31日現在）であった。

#### ④評価

Bb への掲示および周知が遅れたため、回答率が低調であったことは反省しなければならない。以下、結果を概略的かつ抜粋して評価する。

メジャー選択のための重要基礎科目である「リベラルアーツ入門」について、「オムニバス形式の授業は満足した」という命題に対しては「あてはまる」が 30.1%、「どちらかといえばあてはまる」が 39.6%であった。これは昨年度の結果（前者：30.4%／後者：41.3%）とほぼ同様の良好な結果であったといえる。

メジャー選択をする上で重要な導入科目（100 番科目）に関しては、「授業には意欲的にとりくんだ」という命題に対して「あてはまる」が 42.8%、「どちらかといえばあてはまる」が 41.2%となっており、また「授業全体についてよく理解できた」という命題に対しては「あてはまる」が 20.6%、「どちらかといえばあてはまる」が 60.3%であった。いずれも肯定傾向の回答が合計で 80%を超えており、学生たちがメジャーを真剣に選択しようとしている様子が推察されると同時に、各メジャーの導入科目において学生が理解しやすい授業が展開されていることが読み取れる。

#### 4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

- ①これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。加えて、「研究力」の向上を目指した取り組みもスタートさせる。
- ②新カリキュラムおよび TAMAGAWA VISION 2020 を念頭に置いた FD 活動の学部内における位置づけをよりいっそう明確にし、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していく。
- ③「ブリッジ講座」の運営を通じてリベラルアーツ教育における分野間連携を具体的に実践するとともに、引き続きその他の分野間連携プランを、教員相互の提案・議論を通じて検討していく。
- ④新カリキュラムの運営において、引き続き学生の学習状況（たとえば予習・復習の実践状況）や理解度を把握し、その結果を本学部における学士課程教育の質保証へとフィードバックできるよう努力する。

①の「教育力」に関する面については、FD 研修会、視察会、防災訓練の実施や拡大教授会におけるディスカッション、および日常的な教員相互のブリーフィングなどによって概ね実践されてきたと評価できるが、「研究力」の向上に関しては具体的な取り組みをスタートさせることができなかったため、引き続き今後の課題としたい。②に関しては、FD 研修会において問題認識の共有をすることはできたが、やはり本年度も仕組みの構築にまでは至らなかったため、こちらも引き続きの課題とする。③については「玉川学」の推進とその成果を「ブリッジ講座」へとフィードバックすることがスタートしたが、引き続き分野間連携のあり方を模索する必要がある。④に関しては、学部カリキュラム改正と全学のそれに年度のずれがあるた

め、学年ごとに異なる新カリキュラムへ教員が適応することに時間と労力をかけざるを得ず、学生の学習状況の把握にまで手がまわらなかったというのが実情である。この点についても継続課題としたい。

## 5 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

- ①これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。また、次年度こそ「研究力」の向上を目指した何らかの取り組みを少しずつでもスタートさせる。
- ②新カリキュラムおよび TAMAGAWA VISION 2020 を念頭に置いた FD 活動を続けるとともに、学部・学科・メジャーの再検討を引き続き進め、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かすべく、具体的な仕組みを構築していく。
- ③「玉川学」および「ブリッジ講座」の運営を通じてリベラルアーツ教育における分野間連携を具体的に実践するとともに、引き続きその他の分野間連携プランを、教員相互の提案・議論を通じて検討していく。
- ④学年ごとに異なるカリキュラムの運営において、学生の学習状況（たとえば予習・復習の実践状況）や理解度を把握し、その結果を本学部における学士課程教育の質保証へとフィードバックできるよう引き続き努力する。

### 3. 教師教育リサーチセンターの活動

#### 1. FD・SD 活動への取り組み理念

本センターは、教員養成課程を運営する大学附置機関として、本学の教員養成におけるFD・SD活動を積極的に行うことにより、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

#### 2. 教師教育リサーチセンターにおけるFD・SD活動の組織構成と役割

センター長、事務長、課長を中心にFD・SD活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務的担当を分担している。

#### 3. 平成24年度の活動内容

##### (1) 玉川教育フォーラム2012

###### ①概要（目的を含む）

以下の要領で玉川教育フォーラム2012を実施した。

コスモス祭開催時に設定することで、本学教員・職員のみならず、近隣教育委員会、全私協加盟大学、各種実習先、学会関係者へ案内し、参加を促した。

本学の歴史にも深い関わりのある八大教育主張講演会の講演者：小原國芳と千葉命吉に焦点をあて、千葉命吉の甥にあたる堀松武一先生をお招きし、小原学長との世代を越えた講演会を行うことで、今後の教育を考える指針を共通理解することを目的とした。



## ②到達目標

150名以上の出席者を目標に掲げた。

## ③活動内容

平成24年11月11日（日）13:00～17:00 於：玉川学園中学年講堂

テーマ：『現代の教育に生きる大正新教育の思想と実践

ー小原國芳と千葉命吉に焦点をあててー』

### 【プログラム】

#### 1. 「大正新教育と八大教育主張講演会」

解 説 森山賢一（玉川大学教育学部教授）

#### 2. 鼎 談

「小原國芳と千葉命吉を語るーその教育思想と実践の真髓」

堀松武一（東京学芸大学名誉教授）

石橋哲成（玉川大学教育学部教授）

司 会 長野 正（玉川大学教育学部教授）

#### 3. 「大正新教育の教育思想と実践から今後の教育を考える」

小原芳明（玉川大学学長）

## ④評価

当日は約200名の出席者となり、盛況に終了し、目標達成となった。

## （2）2012年度 教職課程FD・SD研修会

### ①概要（目的を含む）

各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部処職員にも出席を促した。全国私立大学教職課程研究連絡協議会（以下、全私教協）教員養成制度検討委員会委員長であり、本センター客員教授でもある田子健先生に講師を依頼し、以下内容（目的）に基づく研修会を行った。

### ②到達目標

以下活動内容の「内容（目的）」に示されているように、今後の大学の課題、教員養成に対する使命について共通認識を持つ。

### ③活動内容

日 時：平成25年3月5日（火）17:15～18:45

場 所：大学研究室棟B104会議室

対 象：全学専任教職員

内 容（目的）：平成24年8月中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の答申を受け、教員養成改革に向けてこれからの教員に求められる資質能力、取り組むべき課題、教員免許制度改革の方向性も具体的に示される中、今後の大学の課題を捉え、本学の教員養成に対する使命に共通認識を持つ。

### 【プログラム】

1. 教師教育リサーチセンター長挨拶 森山賢一
2. 講演  
演題 「教員養成改革の現在—中教審答申後の大学の課題—」  
講師 日本女子体育大学教授  
玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授  
全私教協教員養成制度検討委員会委員長 田子健氏
3. 質疑応答
4. 大学 FD 委員会 委員長挨拶 菊池重雄



#### ④評価

田子先生より、中教審の答申後の教員養成等の動きを具体的にお話頂いた。教員養成に携わる教員及び事務職員に対しての心構えや指針を再認識させて頂き、前向きな質問等も出ていたため、大変有意義な研修会となった。

#### 4. 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 24 年度は FD・SD 研修を 2 回行う予定で計画した。実際、昨年度は『玉川教育フォーラム 2012』を行い、当フォーラムに FD・SD 研修的要素を組み込む形としたことで、FD・SD 研修会は 1 回行う形とした。結果的に 2 回 FD・SD 研修を行った形としたため計画は達成した。

#### 5. 今後（平成 25 年度以降）の予定・課題について

平成 25 年度については、引き続き玉川教育フォーラムを行いつつ、FD・SD 研修会を年間 2 回開催するように予定としたい。

## Ⅱ 教員研修

### 新任教員研修会

平成 25 年度採用の新任教員（助教以上）に対し、大学 FD 委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は平成 14 年度より開始されたもので、11 回目の開催となる。参加者 16 名で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 25 年 2 月 28 日（木）10:00～17:10 \*18:00 より、懇親会開催  
3 月 1 日（金）10:00～16:00

場 所：教学事務棟 3 F 会議室

対 象：平成 25 年度採用の助教以上の新任教員

研修目的：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。  
・専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。  
・専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

#### （1）研修プログラム内容

##### 1 日目：2 月 28 日（木）

10:00	開始／研修説明	学士課程教育センター
10:05	開催にあたって	小原芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介	学士課程教育センター
10:40	講演「玉川大学の教育」	高橋貞雄 高等教育担当理事
12:00	昼食会	
13:00	キャンパス・ツアー	人事部
14:20	休 憩	
14:30	講演「これからの大学で働くということ」	菊池重雄 教学部長
15:50	休 憩	
16:00	生活上の学生指導について	学生センター
16:15	アカデミック・ポートフォリオについて	学士課程教育センター
16:25	質疑応答／翌日の予定説明	学士課程教育センター
16:40	キャンパス・カード用写真撮影	DTP 制作課
17:00	終 了（一時解散）	
18:00	懇親会	大学 FD 委員会
21:00	終 了	

2日目：3月1日（金）

10:00	本日の研修説明	学士課程教育センター
10:10	本学の ICT を活用した教育 玉川大学共通アカウントについて	e エデュケーションセンター
11:20	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報システム室
11:40	玉川学園の個人情報保護方針について	教育企画部教育環境コンプライアンス課
12:10	昼 食	
13:10	教学事項に関する質疑応答 ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要 ・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導 ・年間授業計画 ・学則・規程等（授業、休講、補講、試験、成績等） ・教学事務手続要領（研究費、出張（国内外）等）	教育学部 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> <span style="font-size: 2em;">{</span> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 5px;">           教務課            授業運営課            学務課         </div> </div>
14:30	研究者情報システムについて	教育学部教務課
15:00	質疑応答／まとめ	学士課程教育センター
15:30	終了	

（2）配付資料・参考資料

資料No.	資料タイトル	担当部処
なし	平成 25 年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部研修センター
	平成 25 年度新任教員研修会 出席者一覧	
	玉川学園案内図（キャンパス・ツアールート）	
	平成 25 年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	
	創立者の息づかいが伝わる「小原記念館」 (全人No.739 2010. 5月号抜粋)	人事部人事課
	大学教員の勤務について	
	新しく加入者になられる皆さんへ（共済事業）	
	WELBOX 会員の皆様へ	
	図書館利用ガイド 教員用（冊子）	図書館運用課
1	「玉川大学の教育」	高橋貞雄 理事 (学士課程教育センター)
2	「これからの大学で働くということ」	菊池重雄 教育学部長
3	教職員のための学生支援要項（冊子） ※割愛	学生センター

資料No.	資料タイトル	担当部処
4	I C Tを活用した教育 (PPT)	eエデュケーション センター
	1-1 新規 学内 LAN 利用アカウント申請書	
	5-1 学内 LAN 接続機器登録申請書	
	学内システム利用ガイド (教員用)	
	e-Education ガイド 平成 24 年度入学生用	
5	「学校法人玉川学園における個人情報保護の取り組みについて」	教育企画部教育環境 コンプライアンス課
	学校法人玉川学園コンプライアンステキストブック	
	学校法人玉川学園個人情報保護テキストブック	
	学校法人玉川学園個人情報保護マネジメントシステムガイドブック	
	よくわかる個人情報保護のしくみ《改訂版》	
	写 「文部科学省所轄事業分野における個人情報保護に関するガイドライン」 (冊子)	
	情報機器 (モバイルシステム) セキュリティ対策ガイド	
	玉川学園における環境への取り組み	
6	学校法人玉川学園組織機構 玉川大学の概要 担当業務等について (PPT)	教学部教務課
	学校法人玉川学園組織事務分掌細則 平成 24 年 4 月 1 日	
	学校法人玉川学園 組織機構図 (平成 25 年 4 月 1 日施行案)	
	在籍学生数一覧 (20120501)	
	教職員在籍者数 平成 24 年 5 月 1 日	
	学部運営組織	
	ご着任にあたって	教学部学務課
	各種事務手続き【教学 Information】について	
	平成 25 年度新任教員研修会 教学事項【授業運営課】	教学部授業運営課
	7	資料 1 研究者情報システム ReaP 教員用マニュアル (説明会用抜粋)
資料 2 研究者情報システム ReaP 管理者・教員共通マニュアル (説明会用抜粋)		
事前送付	小原國芳『全人教育論』	玉川大学出版部
	玉川学園編『愛吟集』	玉川大学出版部
	「全人 2013 年 2 月号」	玉川大学出版部
	玉川学園 玉川大学 総合パンフレット	キャンパス インフォメーションセンター

### (3) 実施の成果

本学における教育について、昨年度に引き続き、高等教育のコンテキストから参加者に理解してもらえようような講演の時間を設けた。「玉川大学の教育」そして「これからの大学で働くということ」という2つの講演により、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項などとあわせ、大学やそこで働く教員に期待されていることが何かを明確に伝えることができた。研修会の運営にあたっては、全体を通して受講者が参加しやすく過ごしやすい空間・環境を整えることを心がけた。

研修内容・資料・講師の説明については、参加者全員が、「とても充実していた」、あるいは「充実していた」と回答している。

今回の研修のよかった点についてのコメントは、次のとおりである：

- ①不安に感じたところの多くがわかったので、とても良かったです。ありがとうございました。
- ②この半年の勤務の中でわかっていなかったことを整理することができた。また、他の新任の先生方と知り合えたのでよかった（半年前は、同期がいなかったのだ）。
- ③玉川大学について、歴史、理念など理解することができた。
- ④事前に情報が提供されて、着任に対する不安が多少取り除かれた。
- ⑤要点のみの説明で、余分な情報が少なくわかりやすかった。
- ⑥着任後に必要となるシステム、教育、研究等についてアウトラインがよく分かりました。
- ⑦事前に、大学全体の状況・理念（考え方）、事務手続きのことを教えていただき、不安が減りました。
- ⑧玉川学園についての理解が深まった点（小原記念館の見学）。（LED 農園の）レタスがおおいしかったです。
- ⑨システムおよび理念がよくわかった。
- ⑩FDの取り組みについて、大変勉強になりました。
- ⑪4月から同僚となる方々と、お目にかかることができ、とても良かったです。
- ⑫キャンパス・ツアーへの参加
- ⑬多くの情報を入手できてよかった。
- ⑭玉川学園の全体像を把握でき、自分の置かれる立場を再確認できたことで、自覚を新たにすることができました。他教員とのつながりもできたのでとても良い新任研修でした。
- ⑮すみからすみまで、丁寧に教えていました。
- ⑯玉川大学の教育方針を理解できました。スケジュール、システム等の概要を学べました。先生方、職員の方と知り合うことができました。

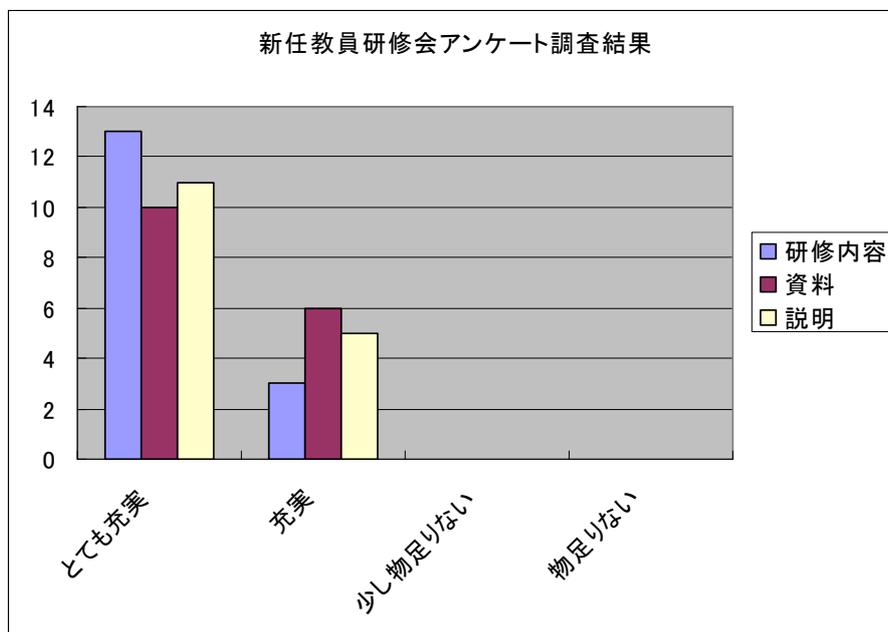
その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった：

- ①パワーポイントによるプレゼンと紙の資料の両方が、すべての説明であるとよかった。
- ②年度末の忙しい時期でもあるので、1日くらいにまとめていただけると助かります。

- ③内容については、当面必要な情報をさらに精選してほしい。
- ④午前中は2時間の設定でしたのでまして長時間には思えませんが、やはり一度、小  
休息があればよいかと思えます。
- ⑤とても充実していましたので、今のところは思いつきません。

また、要望・感想として、次のようなコメントがあった：

- ①新しい方々には、情報が多すぎて、混乱してしまうかもしれないと感じた。
- ②万全な準備の説明で、良く理解することができました。ありがとうございました。
- ③同期の方々や職員の方々にお会いできたのは良かったです。
- ④開催時期が良かった。
- ⑤2日間の日程は適切であったと感じます。ありがとうございました。
- ⑥同じ時期に入られる方と事前にご一緒できて、よかったです。学部の先生にもお会  
いできてよかったです。
- ⑦キャンパス・ツアーが楽しかったです。
- ⑧情熱が伝わってきました。
- ⑨これからもよろしくお願いいたします。
- ⑩ありがとうございました。
- ⑪とても充実した2日間でした。ありがとうございました。



これらの意見から、本研修会の目的・到達目標は達成できていると評価できる。同時に、本研修会が新任の先生方との教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考えられる。

次年度の開催に向け、引き続き、研修内容や提示資料の工夫と質の向上に努めたい。



### Ⅲ コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目の 「授業評価アンケート」

---

#### 1. アンケート実施概要

##### (1) 概要

平成 24 年度春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した。対象科目はコア科目の全科目及びユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目（実験・実技科目を除く）であるが、コア科目については、学期により対象科目群を限定している。

春学期：コア科目 言語表現科目群及び社会文化科目群（但し、実験実習実技科目は除く）  
US 科目（但し、実験実習実技科目、工学部開講の US 科目は除く）

秋学期：コア科目 自然科学科目群及び総合科目群（但し、実験実習実技科目は除く）  
US 科目（但し、実験実習実技科目、工学部開講の US 科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝158 名／165 名（95.8%）

秋学期＝156 名／165 名（94.5%）

実施開講クラス数：春学期＝255 クラス／271 クラス（94.1%）

秋学期＝236 クラス／250 クラス（94.4%）

回答学生数：春学期＝10,037 名／11,956 名（83.9%）

秋学期＝ 8,938 名／11,258 名（79.4%）

##### (2) 実施時期

春学期：7 月 18 日（水）～7 月 24 日（火）

秋学期：1 月 16 日（水）～1 月 22 日（火）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

##### (3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

##### (4) 調査用紙（p.78 参照）

#### 2. 集計結果及び公表（p.54～73 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、全人教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」、言語表現科目群、言語表現科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、総合科目群
--

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 9 分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

# 平成24年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

## コア科目全体

回答数(全体): 4339

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	32

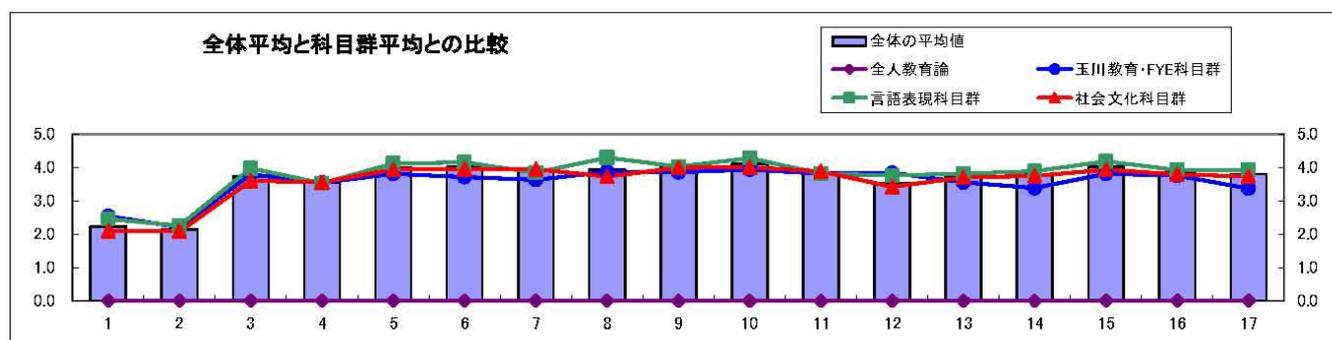
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	2
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	5

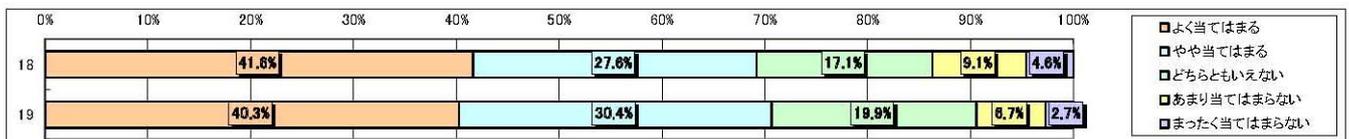
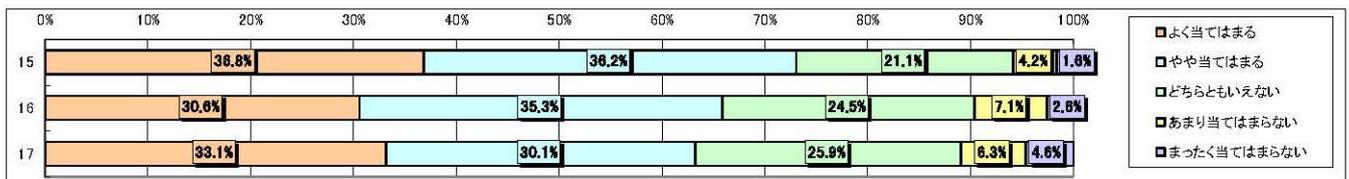
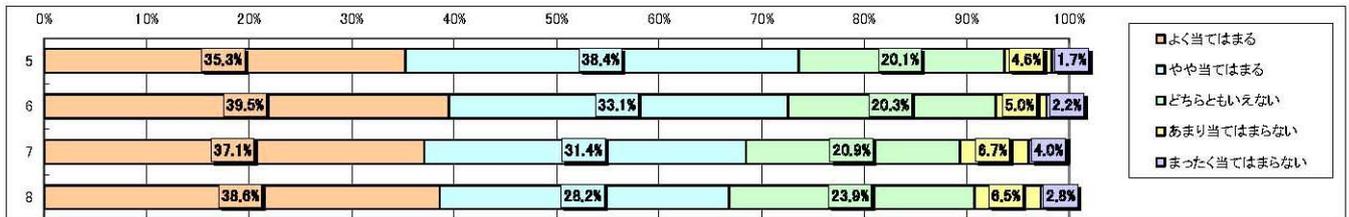
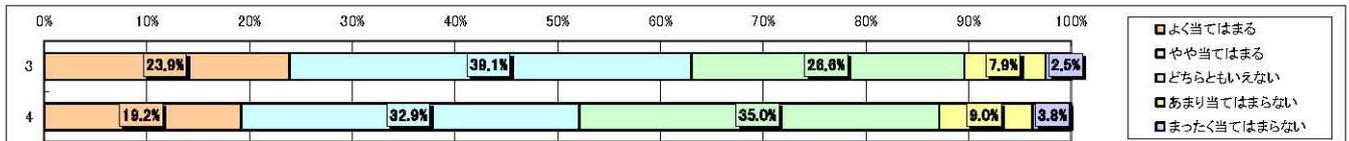
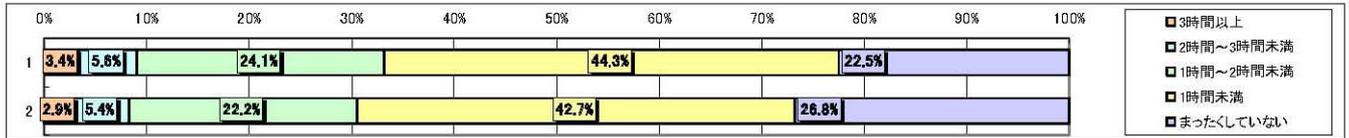
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	15
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	2

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	3
	10 基本的知識が得られた。	4.1	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.5	6
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	6
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	13

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	10

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	10
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	12





◎平均値について  
質問項目毎に「無効」を除いた平均値  
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数  
小数点第2位四捨五入

◎無効数について  
無答、複数回答、記入ミスの数

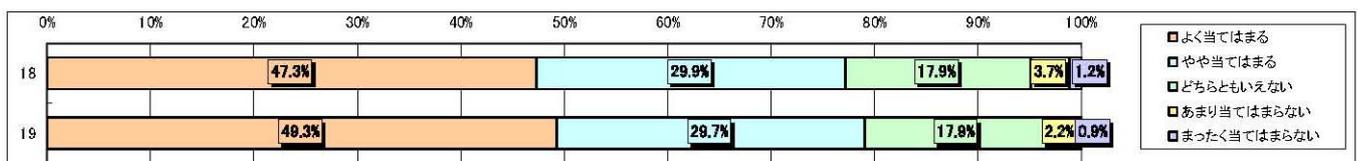
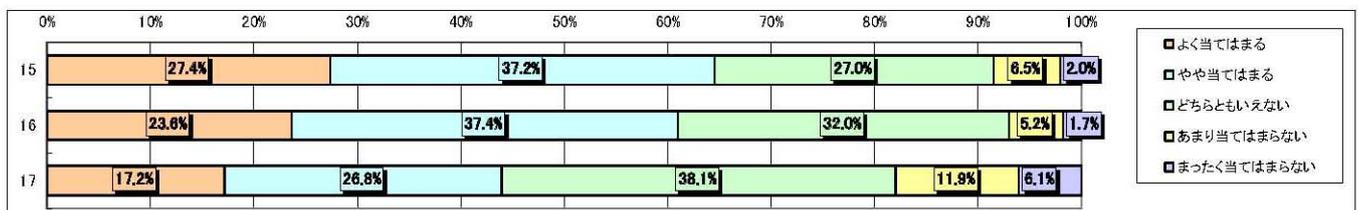
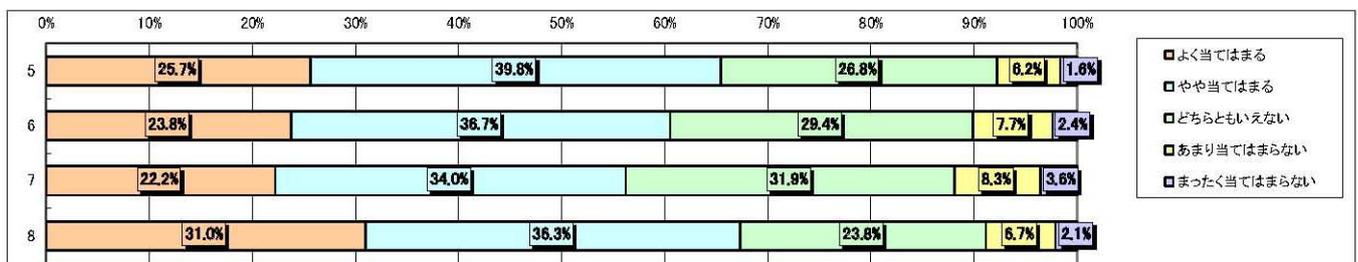
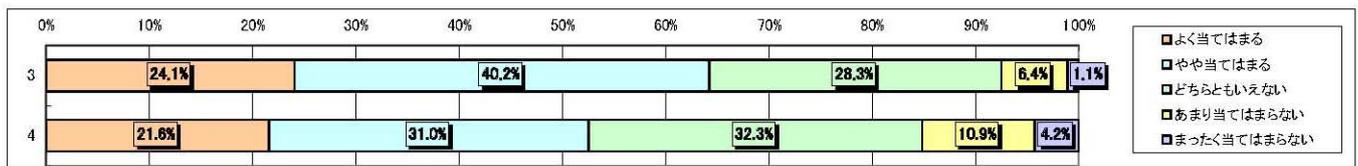
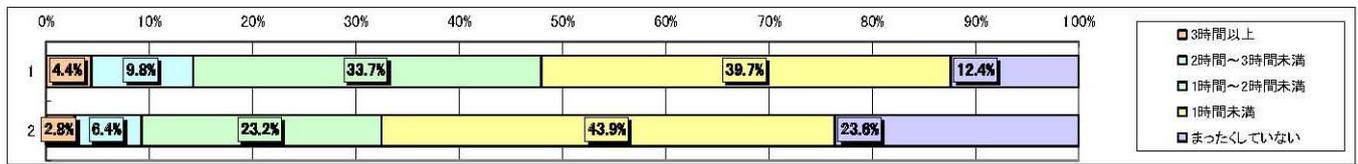
## 平成24年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

### US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 101

回答数(全体): 1721

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	4
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	9
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	1
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.8	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.7	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.6	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	0
	10 基本的知識が得られた。	3.9	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.6	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.4	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.8	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.4	4
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	3



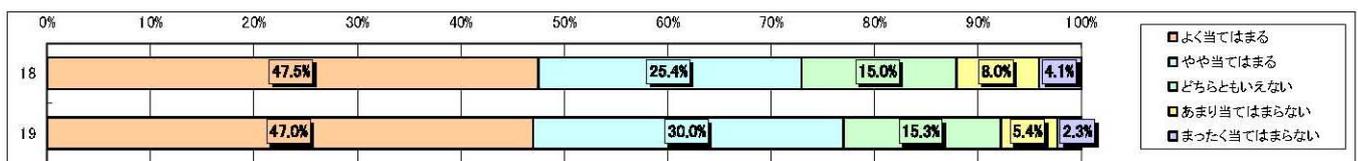
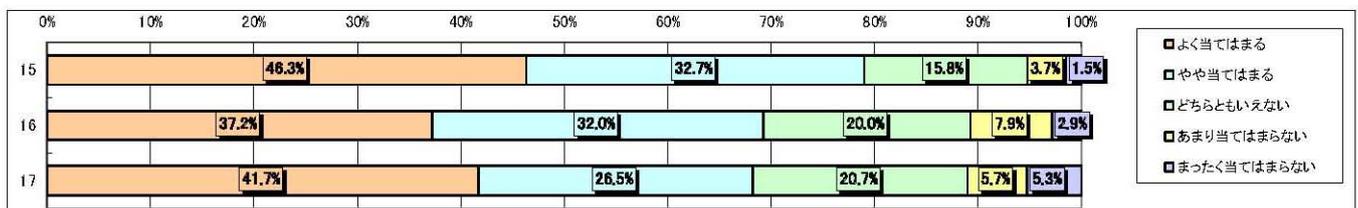
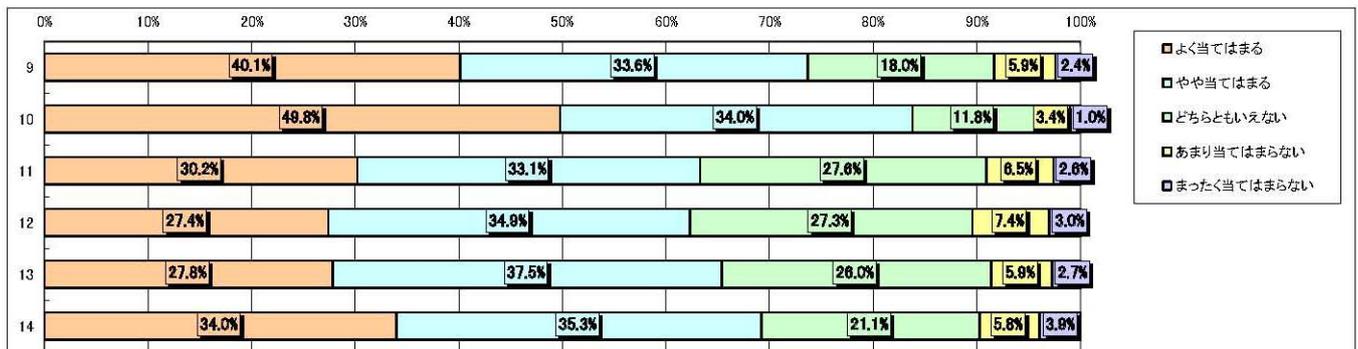
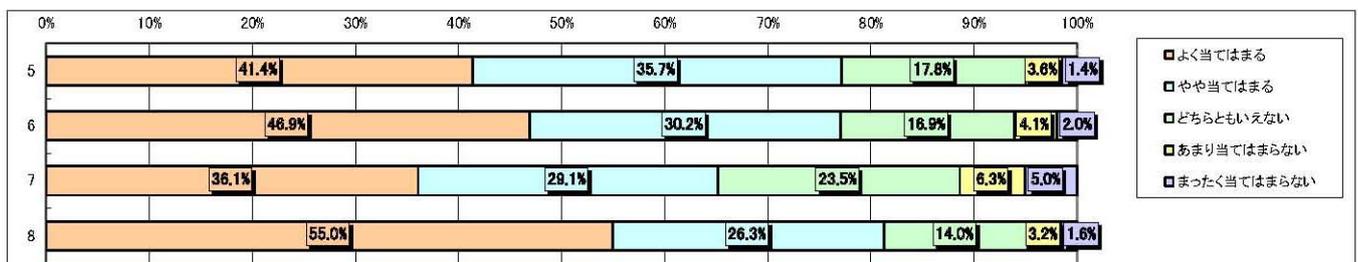
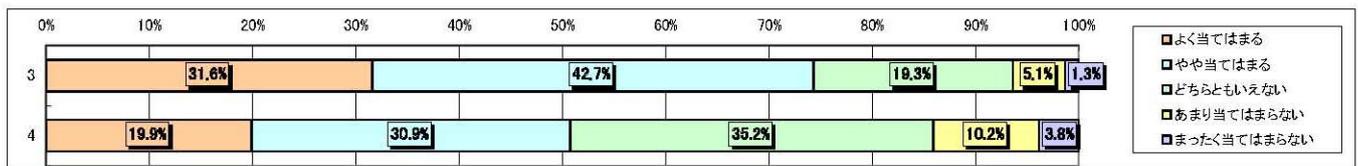
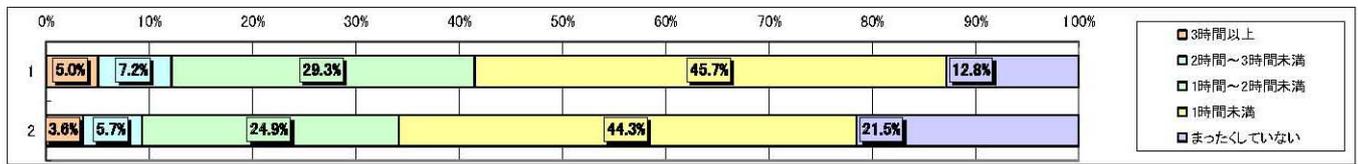
## 平成24年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

### コア科目 言語表現科目群

回答数(全体): 1538

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	10
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.8	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10 基本的知識が得られた。	4.3	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	4
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	5
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	4



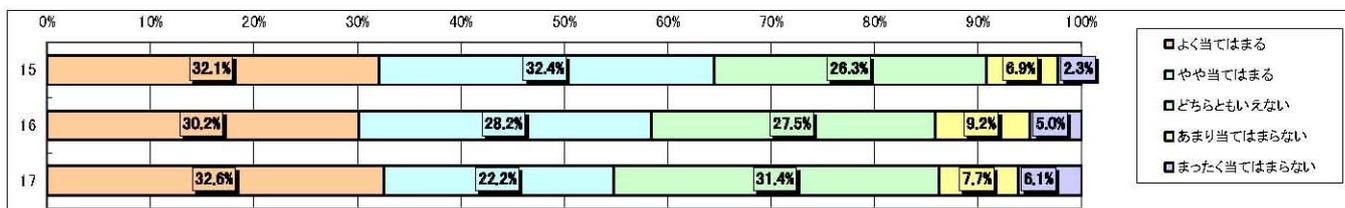
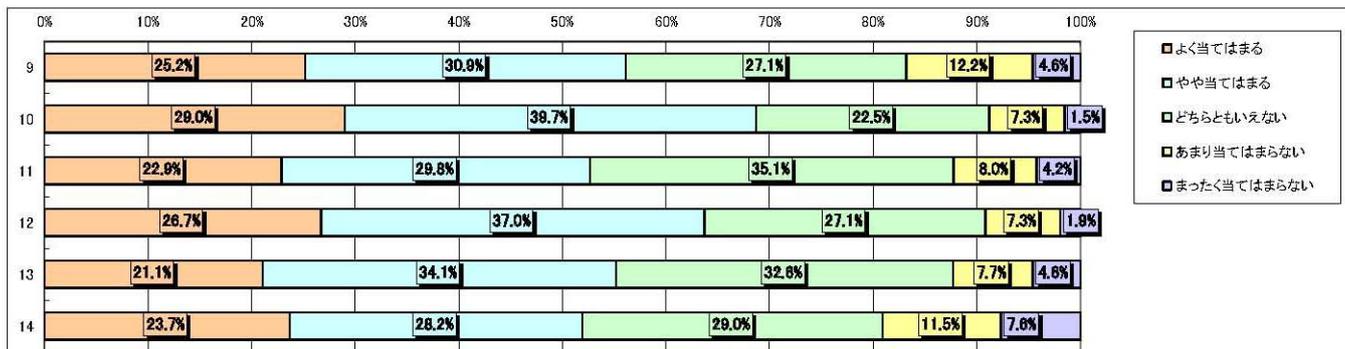
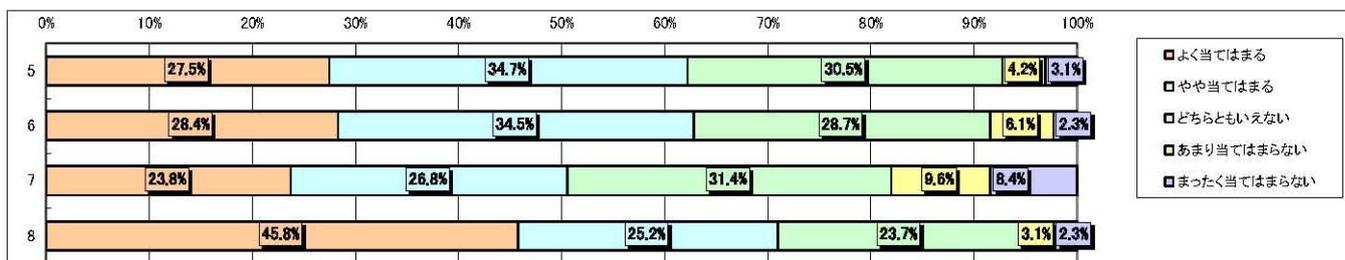
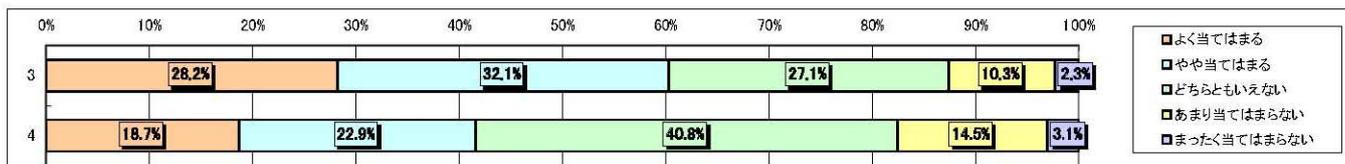
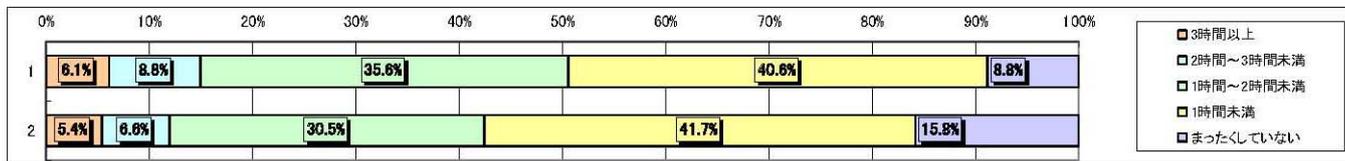
## 平成24年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

### コア科目 言語表現科目群 英語

回答数(全体): 262

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	1
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.4	3
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.4	0
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.8	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.8	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.5	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.6	0
	10 基本的知識が得られた。	3.9	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.6	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.6	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.5	0
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.7	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	1
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.7	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	2



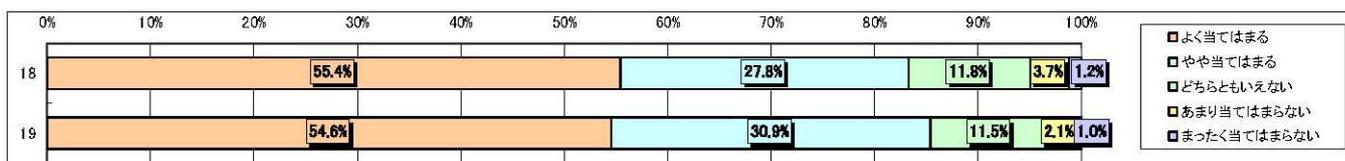
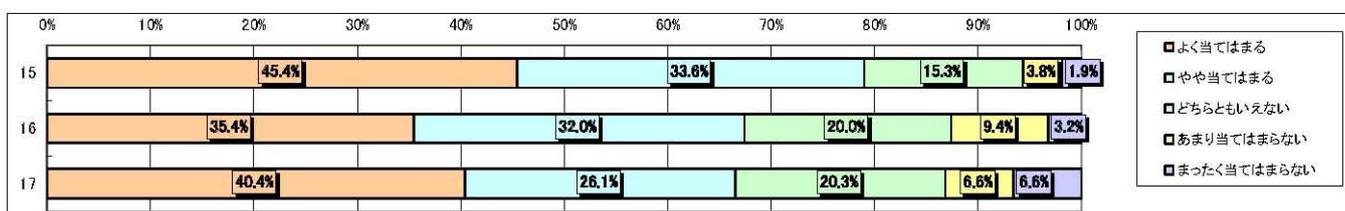
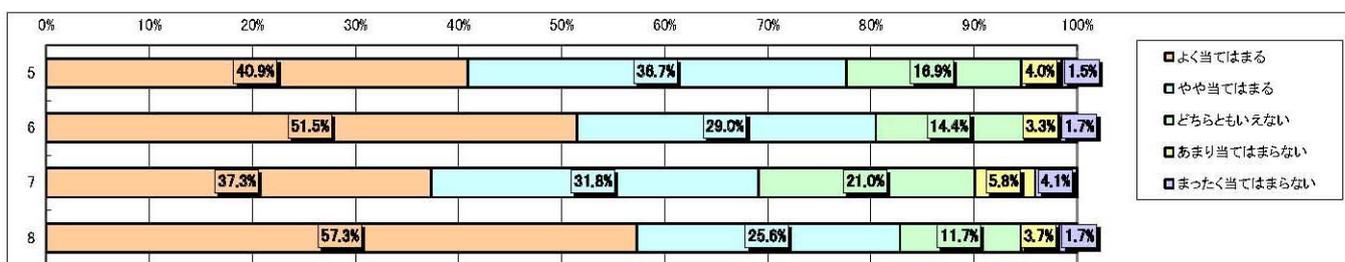
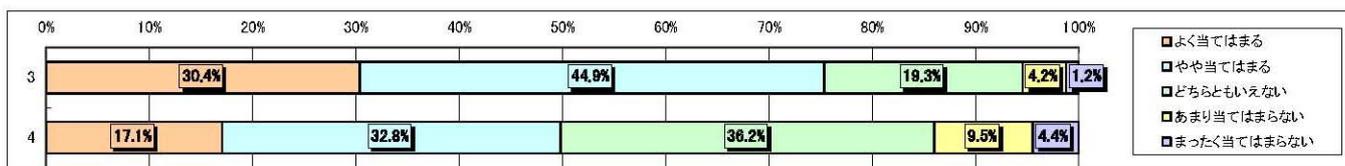
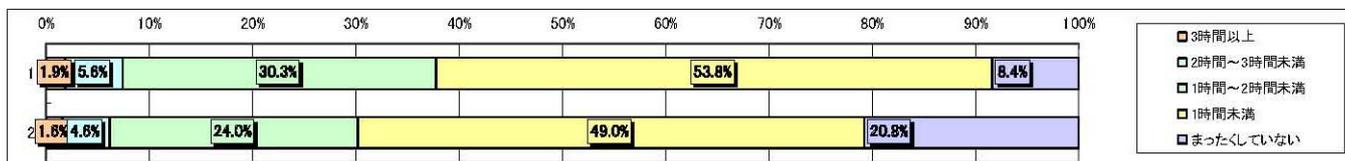
## 平成24年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

### コア科目 言語表現科目群 英語以外

回答数(全体): 810

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.4	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	2
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	1
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.3	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.6	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	1
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	3
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	0



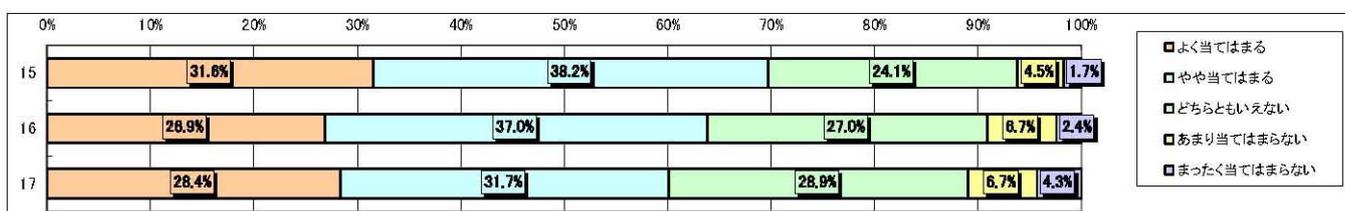
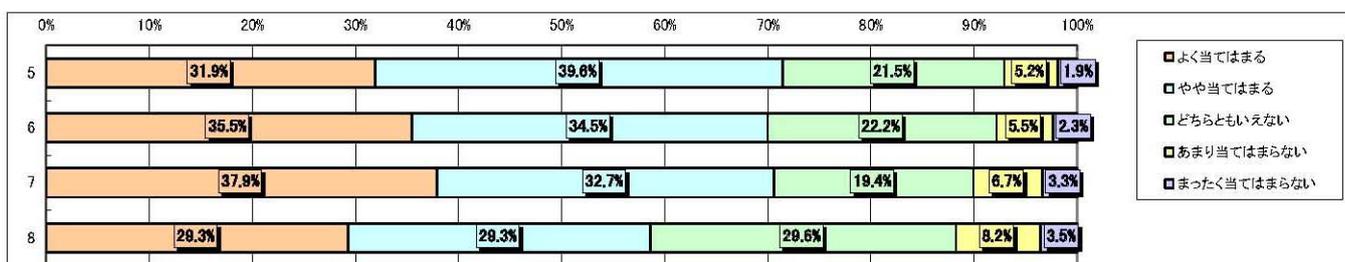
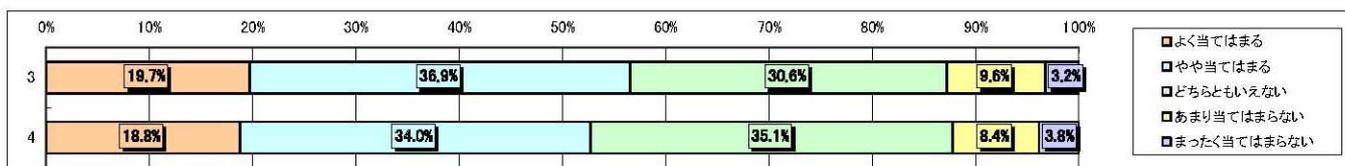
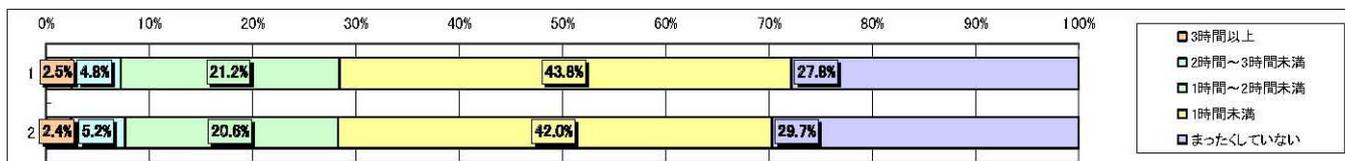
## 平成24年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

### コア科目 社会文化科目群

回答数(全体): 2768

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	0
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	22
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.6	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	3
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	9
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.0	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.4	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	9
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	5
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	8



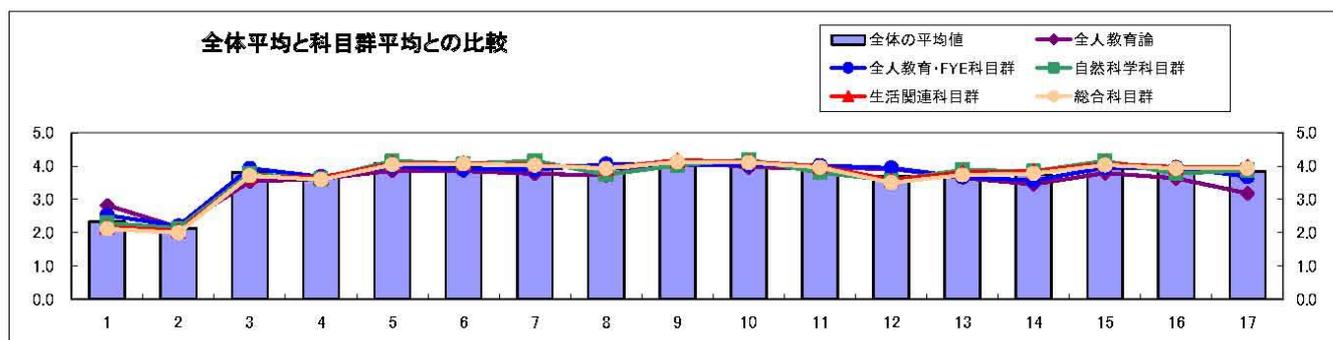
# 平成24年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

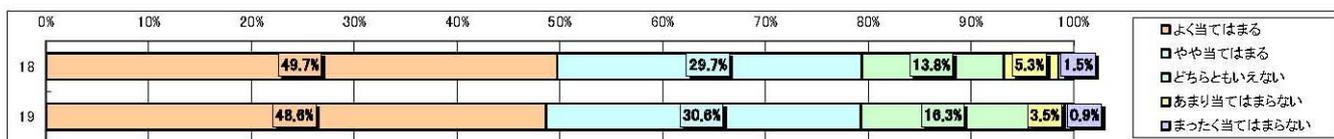
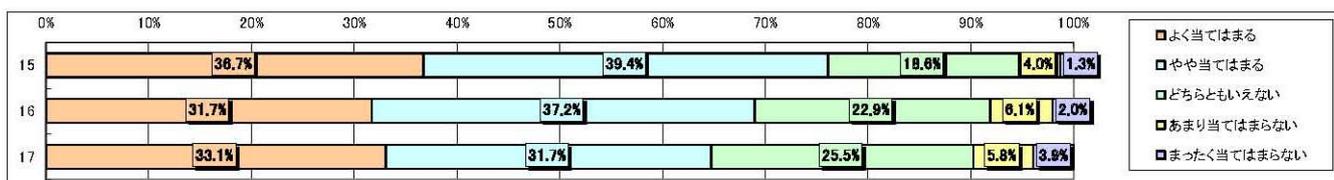
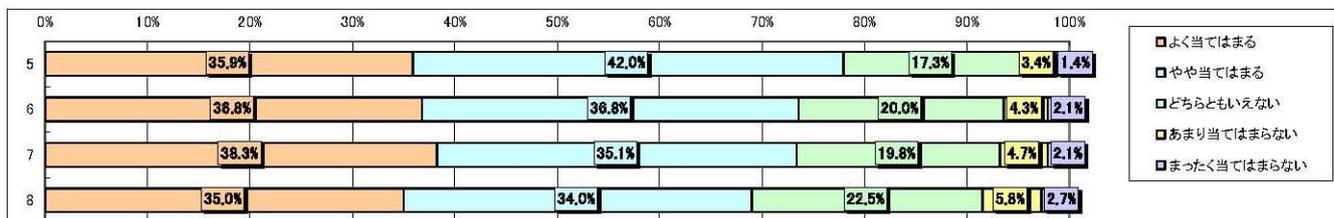
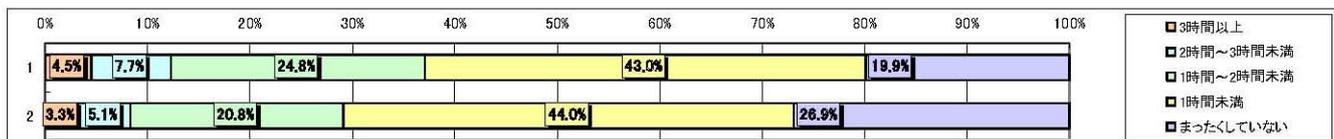
玉川大学

## コア科目全体

回答数(全体): 5297

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	18
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	48
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	9
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	17
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	11
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	13
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	11
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	12
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	7
	10 基本的知識が得られた。	4.1	7
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	12
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	8
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	9
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	14
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	7
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	7
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	15
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	23
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	24





◎平均値について  
質問項目毎に「無効」を除いた平均値  
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数  
小数点第2位四捨五入

◎無効数について  
無答、複数回答、記入ミスの数

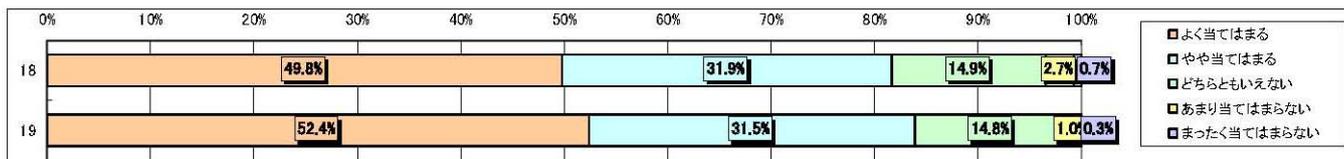
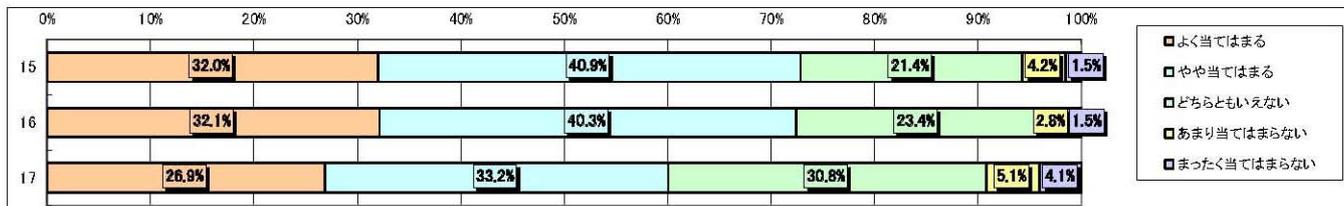
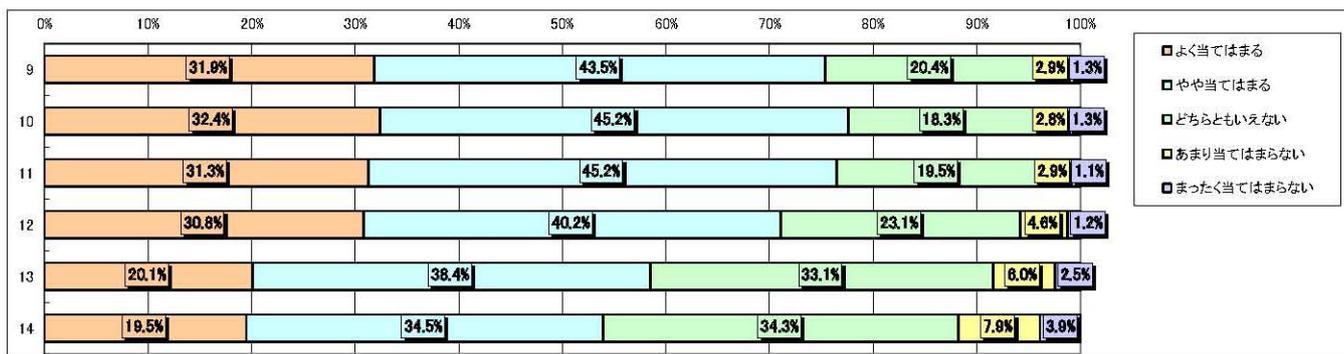
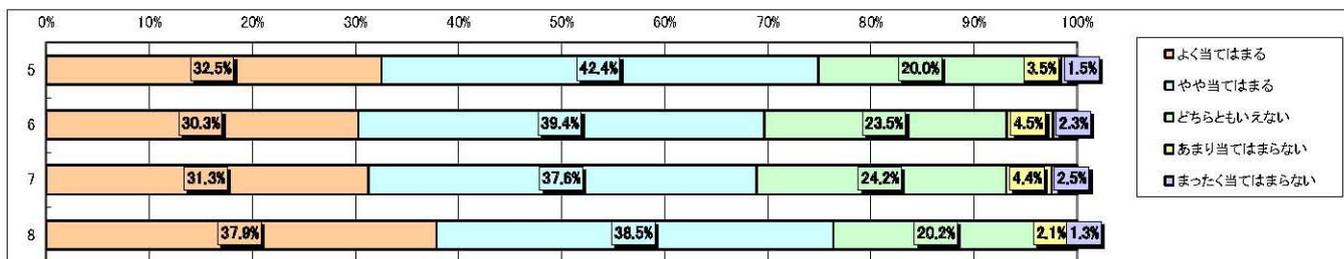
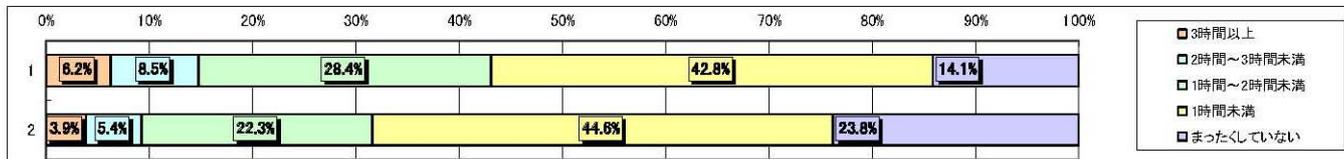
# 平成24年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

## コア科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 102

回答数(全体): 1781

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	4
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	18
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	4
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	7
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	4
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.0	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.6	4
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	6
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	6



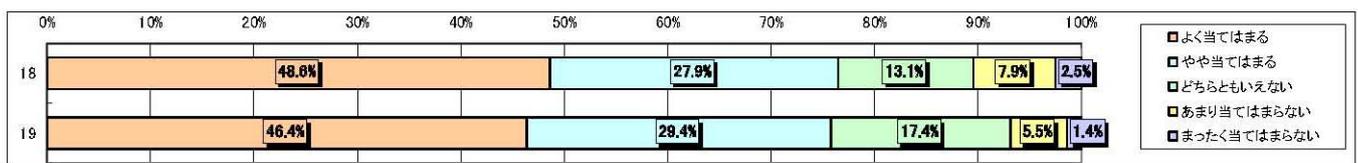
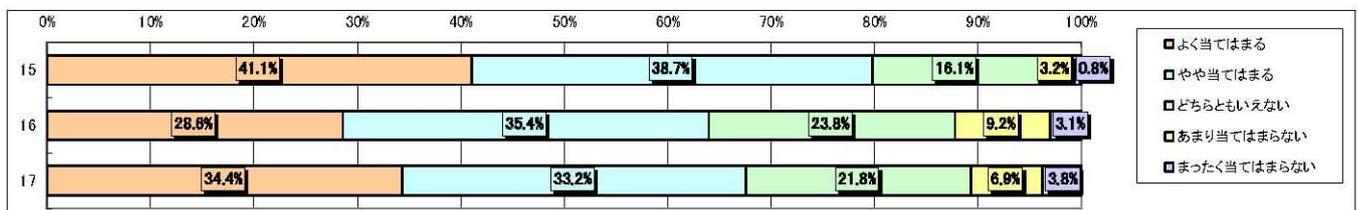
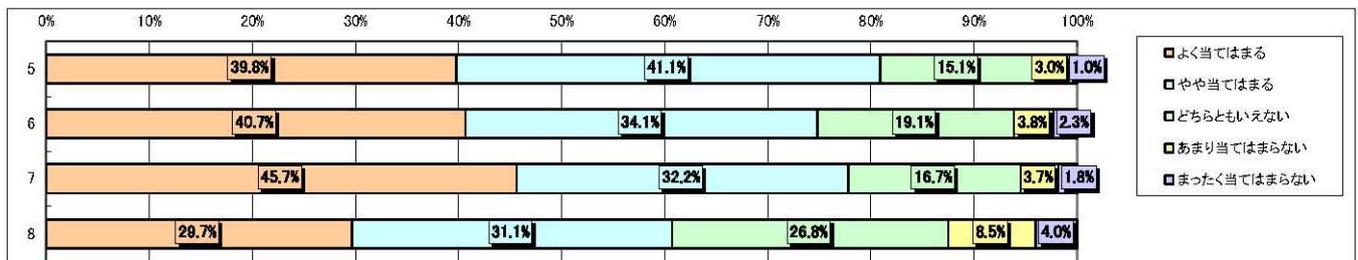
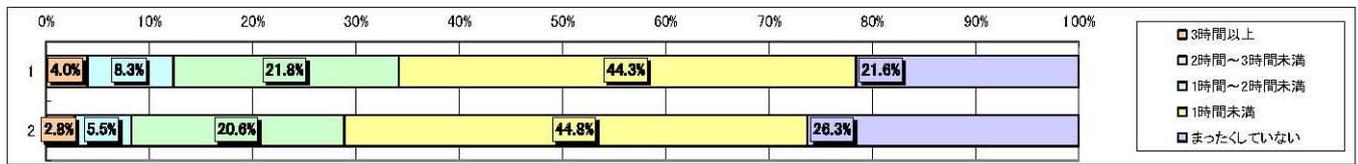
# 平成24年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

## コア科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1671

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	8
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	16
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	3
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10 基本的知識が得られた。	4.2	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	5
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	3
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	5
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	6



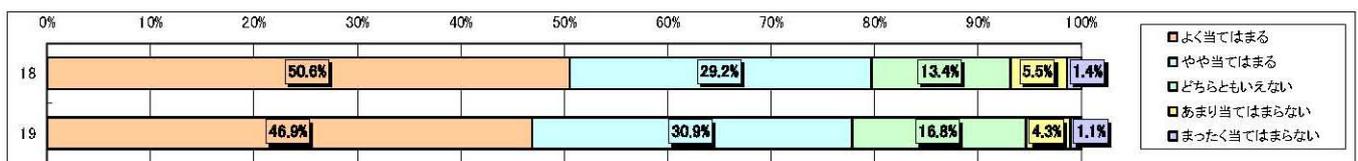
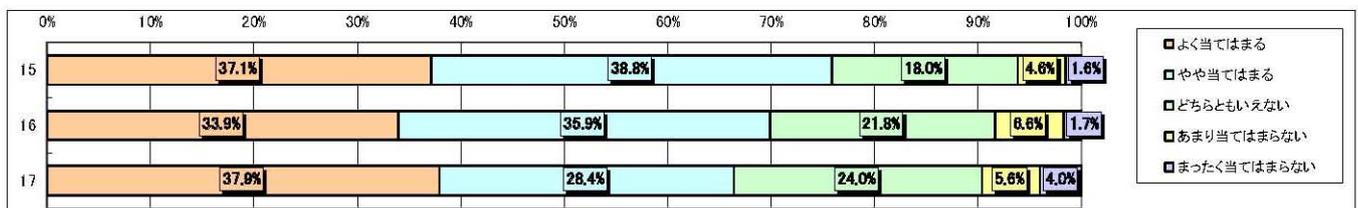
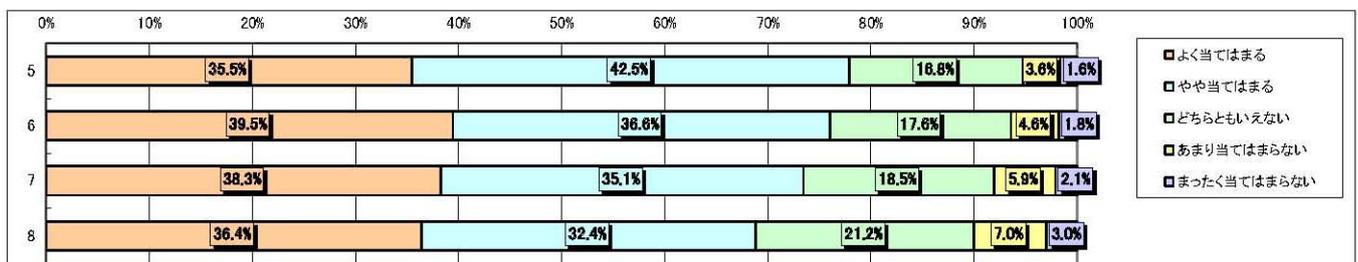
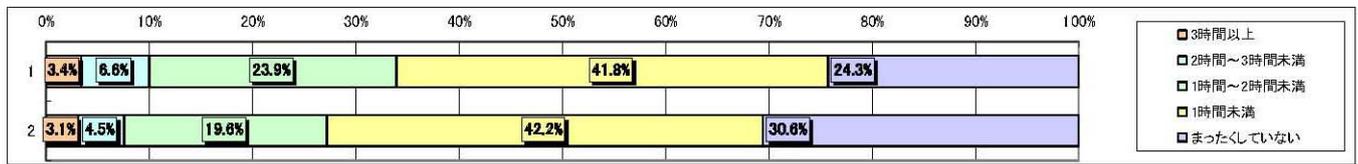
平成24年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 総合科目群

回答数(全体): 1306

分野	この授業に対する学生の学習時間について		この授業の 平均値	無効 回答数
I	1	1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	6
	2	上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	14
分野	この授業に対する学生の取り組みについて		この授業の 平均値	無効 回答数
II	3	この授業に積極的に参加した。	3.7	4
	4	シラバスは受講に役立った。	3.7	7
分野	この授業の進め方について		この授業の 平均値	無効 回答数
III	5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	7
	6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	4
	7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	5
	8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	5
分野	この授業を受けてみて		この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9	新しい考え方・発想に触れた。	4.2	4
	10	基本的知識が得られた。	4.1	4
	11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	6
	12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	4
	13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	5
	14	学問的興味をかきたてられた。	3.8	5
分野	この授業を総合的に振り返って		この授業の 平均値	無効 回答数
V	15	授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	3
	16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	3
	17	この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	6
分野	その他		この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18	この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	12
	19	この授業の受講者数は適切であった。	4.2	12







## 参 考 资 料

## 参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

---

### 第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 24 年 4 月 24 日 (火) 17:30~19:00
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議 案 : (1) 平成 24 年度 会議日程に関する件  
(2) 平成 24 年度 コア科目/US 科目 学生による授業評価アンケート 実施に関する件  
(3) 平成 24 年度 FD 研修会等に関する件
- 報 告 : (1) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について  
(2) 学士課程教育センター (コア・FYE 教育センター) 主催研修会等 DVD の貸し出しについて

### 第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 24 年 5 月 31 日 (木) 17:30~18:30
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議 案 : (1) 平成 24 年度春学期授業評価アンケート US 科目 (学部・学科開講) の取り扱いに関する件
- 報 告 : (1) 今年度の FD 研修会等計画について  
(2) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について  
(3) 「平成 23 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について

### 第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 24 年 9 月 14 日 (金) 15:00~16:30
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議 案 : (1) 平成 24 年度 大学 FD 委員会主催研修会等実施計画に関する件
- 報 告 : (1) 平成 24 年度 各学部 FD 活動計画について  
(2) 平成 24 年度 授業参観実施計画について

## 第4回大学FD委員会

- 日時 : 平成24年11月20日(火) 17:30~19:00  
場所 : 教学事務棟150/151会議室  
議案 : (1) 平成25年度 新任教員研修会に関する件  
報告 : (1) すでにご案内のFD研修会等について  
(2) 大学教職員セミナーについて  
(3) 大学IRコンソーシアムの学生調査の実施について

## 第5回大学FD委員会

- 日時 : 平成25年3月22日(金) 15:00~16:30  
場所 : 教学事務棟150/151会議室  
報告 : (1) 研修会開催について  
(2) 学生による授業評価アンケートについて  
(3) TAMAGAWA VISION 2020 教員の教育力向上に対する取組について  
(4) 2012年度 教育研究活動等点検調査委員会教務関係専門分科会報告について  
(5) 今年度 各学部のFD活動について

## 参考資料 2. 「授業評価アンケート」用紙

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名
-------

開講時限	曜日	限
------	----	---

担当教員名
-------

5	4	3	2	1
3時間以上	2時間 〜 3時間未満	1時間 〜 2時間未満	1時間未満	まったくしていない

### I. この授業に対するあなたの学習時間について

		5	4	3	2	1
1	1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1
2	上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	5	4	3	2	1

5	4	3	2	1
よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

### II. この授業に対するあなたの取り組みについて

		5	4	3	2	1
3	この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
4	シラバスは受講に役立った。	5	4	3	2	1

### III. この授業の進め方について

		5	4	3	2	1
5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
<b>IV. この授業を受けてみて</b>						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

**V. この授業を総合的に振り返って**

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

**VI. その他**

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

## 参考資料 3. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

**第 1 条** 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

**第 2 条** 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

**第 3 条** 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

**第 4 条** 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

**第 5 条** 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

**第 6 条** 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

**第 7 条** 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

**第8条** 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

**第9条** 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

**第10条** 本委員会に係る事務主管は、学士課程教育センターとする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。



---

平成 25 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (学士課程教育センター)